

『天台小止観』の研究(七)

大野 栄 人

はじめに

本論文は、『天台小止観』の「第八覚知魔事」を、天台止観成立史の立場から、原典解明していこうとするものである。

本研究は、平成十二年度後期(九月～一月)の大学院修士課程の「演習」の授業の研究成果である。授業の受講者は、宗教学仏教学専攻の次の諸氏である。

伊藤光壽(研究生)、鈴木あゆみ・瀬田啓道・濱島徳男・春田三千代・水野荘平・和田知見・今井勝子・佐藤宗弘(修士二年)、杉浦綾子・濱口寛朗・吉見典生(修士一年)、三好秀範(聴講生)

『天台小止観』の研究(七)(大野)

毎週、右の担当の大学院生諸氏にやって頂いたものを、伊藤光壽氏が文章化され、詳細な「注」を作成して頂き、それに私が手を加えたものである。

本研究に、もし研究成果があるとすれば、全面的にご尽力を頂いた伊藤光壽氏、実際に下調べをし、授業を担当してもらった大学院受講生諸氏の功績である。

もし非があれば、その一切の責任は、授業を指導した私にあることをお断りしておきたい。

（原文）

修正觀法門 覺知魔事 第八

魔羅、秦言殺者、奪行人功德之財、殺智慧命故。云何名魔事。如佛、以功德智慧、度脫衆生、入涅槃、爲事。魔亦如是。常以破壞、衆生善根、令流轉生死、爲事。若能安心道門、道高則魔盛、故須善識魔事。但魔有四種。一煩惱魔、二陰入界魔、三死魔、四鬼神魔。前三種魔、皆是世之常事、今不分別。鬼神魔相、此事須知、今當略說。鬼神魔、凡有三種、一精彪鬼、二堆惕鬼、三魔羅鬼。

一、精彪者、十二時獸、變化作種種形色、或作少男少女、老宿之形、及可畏身相等、種種非一、以惱惑行者。此諸精彪、欲惱行者、各當其時而來、善須別識。若多於寅時來者、必是虎豹等、若多於卯時來者、必是菟麋鹿等、若多於辰時來者、必是鼈鼉等、若多於巳時來者、必是蛇蟒等、若多於午時來者、必是馬驢駝等、若多於未時來者、必是羊等、若多於申時來者、必是猴獾等、若多於酉時來者、必是鷄鳥等、若多於戌時來者、必是狗狼等、若多於亥時來者、必是豬豕

等、若多於子時來者、必是鼠等、若多於丑時來者、必是牛犢等。行者若能、善占則知、恆用此時來者、卽是其獸精彪、呼其名字、而呵責之、卽當謝滅。

二、堆惕鬼者、亦作種種、惱觸行人、或如蟲蝎、緣人顏面、鑽刺瘡瘡、或擊攪人兩腋下、或乍抱持行人、或復言說、音聲喧鬧、及作諸獸之形、異相非一、來惱行者、應卽覺知、一心閉眼、陰而罵之、作如是言。我今識汝、汝是、此閻浮提中、食火嗅香、偷臘吉支、邪見喜破戒種、我今持戒、終不畏汝。若出家人、應誦戒序、若在家人、應誦三歸、五戒八戒等、鬼便却行、葡萄而去。如是等作、種種留難、惱人相貌、及餘斷除之法、並如禪經中廣說。

三、魔羅、惱亂行者、是魔多化作、三種五塵境界相、來破人善心。一、作違情事、卽是作可畏五塵、令人恐懼、二、作順情事、卽是作可愛五塵、令人心生愛著、三、作非違非順事、卽是作平品五塵、動亂行者。是故魔名殺者、亦名華箭、亦名五箭、射五情故。

一色中作三種境界、惑亂行者、作順情色者、或作父母兄弟、諸佛形像、端正男女、可愛之境、令人心著色中、作違情境界者、或作虎狼師子、羅刹之形、種種可畏像、來怖行人、

非違非順者、但作平品之形、動亂人心、令失禪定、故名爲魔。化作種種好惡音聲、或作種種香臭之氣、或作種種好惡之味、或作種種苦樂境界、來觸人身、皆是魔事。其相衆多、不可具說。

舉要言之、若作種種五塵、惱亂行人、令失善法、起諸煩惱、皆是魔軍。以能破壞、平等佛法、令起貪欲憂愁、瞋恚睡眠等、諸障道法故。如經偈中說、

欲是汝初軍 憂愁爲第二

飢渴第三軍 渴愛爲第四

睡眠第五軍 怖畏爲第六

疑悔第七軍 瞋恚爲第八

利養虛稱九 自高蔑人十

如是等軍衆 厭沒出家人

我以禪智力 破汝此諸軍

得成佛道已 度脫一切人

行者、既能覺知魔事、卽當自却之。

却法有二、一者、修士却之、凡見一切、外諸好惡魔境、悉知虛誑、不愛不怖、亦不取捨分別、息心寂然、彼自當滅。

二者、修觀却之、若見如上所說、種種魔境、用止不去、卽

當反觀、能見之心、不見處所、彼何所惱、如是觀時、尋當謝滅。若遲遲不去、但當正念、勿生恐懼、不惜軀命、正心不動、知魔界如、卽是佛界如、若魔界如佛界如、一如無二、則於魔界無所捨、於佛界無所取、卽佛法自當現前、魔境消滅。復次、若見魔境不謝、不須生憂、若見謝滅、亦勿生喜。所以者何。未曾見、有人坐禪、現魔化作虎狼來、剩食其行者、亦未曾見、魔化作男女、剩可爲夫妻也。當知、皆是幻化。愚人不了、心生驚怖、及起貪著、因是心亂失定、發狂致患、皆是行人、無智致患、非魔所作。

復次、若諸魔境惱亂、或經年月不去、但當端心、正念堅固、不惜身命、莫懷憂懼。當誦大乘方等、諸治魔咒、默念誦之、存念三寶。若出禪時、亦當誦咒自防、懺悔慚愧、及誦波羅提木叉戒。邪不干正、久久自滅。

魔事衆多、說不可盡、善須識之。是故初心行人、必須親近善知識、爲有如此等難事故。是魔入人心時、能令人心神狂亂、或憂或喜、因是成患、乃至致死、或時令得、諸邪禪定、智慧神通陀羅尼、說法教化、人皆信伏、後則大壞人、出世善事、及破壞正法。

如是等諸異非一、不可說盡、今略示其要、爲令行者、於坐

『天台小止観』の研究(七)(大野)

禪中、不妄受諸魔境界。取要言之、若欲遣邪歸正、當觀諸法實相。善修止觀、是則無邪不破。故釋論云、除諸法實相、其餘一切、皆是魔事。如偈中說、

若分別憶想 即是魔羅網 不動不分別 是則爲法印

(書を下つ文)

魔事を覚知せよ 第八

魔羅⁽¹⁾とは、秦には殺者という。行人の功德の財を奪い智慧の命を殺すが故なり。いかなるをか魔事と名づくるや。仏のごときは、功德・智慧をもつて衆生を度脱して涅槃に入らしむるを事となす。魔もまたかくのごとく、つねに衆生の善根を破壊して生死に流転せしむるをもつて事となす。もしよく心を道門に安んずるに、道高ければすなわち魔盛んなり。故にすべからくよく魔事を識るべし。

ただし魔に四種あり。一に煩惱魔、二に陰入界魔、三

に死魔、四に鬼神魔なり。前の三種の魔は、みなこれ世の常の事なり。いまは分別せず。鬼神魔の相は、この事すべからく知るべし。いま、まさに略して説くべし。鬼神魔におよそ三種あり。一には精彪鬼、二には堆惕鬼、三には魔羅鬼なり。

一に、精彪とは、十二時の獣が、変化して種種の形色をなすなり。あるいは少男、少女、老宿の形、および畏るべき身相等をなすこと、種種にして一にあらざ、もつて行者を悩惑す。この諸の精彪は、行者を悩まさんと欲せばおのおのその時に當つて來たる。よくすべからく別まえ識るべし。もし多く寅の時に來たらば必ずこれ虎・豹等なり。もし多く卯の時に來たらば必ずこれ菟・麋・鹿等なり。もし多く辰の時に來たらば必ずこれ竜・鼈等なり。もし多く巳の時に來たらば必ずこれ蛇・蟒等なり。もし多く午の時に來たらば必ずこれ馬・驢・駝等なり。もし多く未の時に來たらば必ずこれ羊等なり。もし多く申の時に來たらば必ずこれ猴・獼等なり、もし多く酉の時に來たらば必ずこれ鶏・鳥等なり。もし多く戌の時に來たらば必ずこれ狐・貉等なり。

時において来たならば必ずこれ狗・狼等なり。もし多く亥の時に於いて来たならば必ずこれ猪・豕等なり。もし多く子の時に於いて来たならば必ずこれ鼠等なり。もし多く丑の時に於いて来たならば必ずこれ牛・犢等なり。行者がもしよく占してすなわち恒にこの時をもちいて来たならばすなわちこれその獣の精彪なることを知り、その名字を呼んでこれを呵責せよ。すなわちまさに謝滅すべし。

二に、堆惕鬼とは、また種種に行人を脳触することをなす。あるいは虫・蝮のごとく人の顔面を縁じて鑽刺すること瘡瘡たり。あるいは人の両腋の下を擊擻し、あるいは乍ちに行人を抱持し、あるいはまた言説の音声が喧鬧ならん。および諸の獣の形をなし、異相は一にあらざ。来たつて行者を悩まさば、まさにすなわち覚知して一心に眼を閉じひそかにこれを罵つてかくのごとくこの言をなすべし。「われ、いま、汝を識る。汝はこれこの閻浮提の中で、火を食い香を嗅ぎ臙を偷める吉支なり。邪見にして破戒を喜ぶ種なり。われ、いま、戒を持す。ついに汝を畏れず。」と。もし出家の人ならば、まさに戒序を誦すべし。もし在家の人ならばまさに三帰・五戒・八

戒等を誦すべし。鬼はすなわち却行し葡萄して去らん。かくのごとき等の種種の留難をなして、人を悩ます相貌、および余の断除の法は、ならびに禅經のなかに広く説けるがごとし。

三に、魔羅とは、行者を悩乱す。この魔は多く三種の五塵の境界の相を化作し、来たつて人の善心を破す。一には、違情の事を作す。すなわちこれ畏るべき五塵を作して人をして恐懼せしむ。二には、順情の事を作す。すなわちこれ愛すべきの五塵を作して人の心をして愛着を生ぜしむ。三には、非違非順の事をなす。すなわちこれ平品の五塵を作して行者を動乱す。この故に魔を殺者と名づけ、また華箭と名づく。また五箭と名づく。五情を射るが故なり。

一つの色のなかに三種の境界をなして行者を惑乱す。順情の色を作すとは、あるいは父母、兄弟、諸仏の形象端正なる男女、愛すべきの境を作して、人の心をして色のなかに著せしむ。違情の境界を作すとは、あるいは虎、狼、師子、羅刹の形、種種の畏るべきの像を作して、来たつて行人を怖るかす。非違非順とは、ただ平品

の形を作して、人心を動乱して禅定を失わしむ。故に名づけて魔となす。種類の好悪の音声を化作し、あるいは種類の香臭の氣を作し、あるいは種類の好悪の味を作し、あるいは種類の苦楽の境界を作して、来たつて人身に触るるは、みなこれ魔事なり。その相は衆多なり。具さに説くべからず。

要を挙げてこれをいわば、もし種類の五塵を作して行人を悩亂し、善法を失わしめ、諸の煩惱を起さしむるは、みなこれ魔軍なり。よく平等の仏法を破壊し、貪欲・憂愁・瞋恚・睡眠等の諸の障道の法を起さしむるをもっての故なり。『経』の偈のなかに説けるがごとし。

「欲はこれ汝の初軍 憂愁をなして第二とす

飢渴は第三軍 渴愛をなして第四とす

睡眠は第五軍 怖畏をなして第六とす

疑悔は第七軍 瞋恚をなして第八とす

利養虚称は九 自らを高くし人を蔑むは十なり

かくのごとき等の軍衆 出家の人を厭没す

われ禅智の力をもつて 汝がこの諸軍を破し

仏道を成ずることを得おわつて 一切の人を度脱す」

と。行者すでによく魔事を覚知せば、すなわちまさにみずからこれを却くべし。

却くる法に二あり。一には止を修してこれを却く。およそ一切の外の諸の好悪の魔境を見ては、ことごとく虚誑なりと知つて愛せず怖れず、また取捨分別せず、心を息して寂然たらば、彼おのずからまさに滅すべし。二には、観を修してこれを却く。もし上に説けるごとき種類の魔境を見て、止を用うるも去らざれば、すなわちまさに能見の心を反観すべし。処所を見ざれば、彼はなんの悩ますところぞ。かくのごとく観するとき、尋いでまさに謝滅すべし。もし遲遲として去らざれば、ただまさに正念にして恐懼を生ずることなく、軀命を惜しまず、心を正しくして動ぜず、魔界の如はすなわちこれ仏界の如なりと知るべし。もし魔界の如と仏界の如と一如にして二なくんば、すなわち魔界においても捨つるところなく、仏界においても取るところなし。すなわち仏法おのずからまさに現前し、魔境は消滅せん。またつぎに、もし魔境の謝せざるを見るも、すべからく憂いを生ずべからず。もし謝滅するを見るも、また喜

びを生ずることなかれ。所以はいかん。いまだかつて人あつて坐禪するに、現ずるところの魔が化して虎狼となり、来たつてあまつさえその行者を食うことを見ず。また、いまだかつて魔が化して男女となり、あまつさえ夫婦となるべきことを見ず。まさに知るべし、みなこれ幻化なり。愚人は了せず、心に驚怖を生じ、および貪著を起し、これに困つて心乱れて定を失し、狂を発し、患を致す。みなこれ行人が無智にして患を致すなり。魔の作すところにはあらず。

またつぎに、もし諸の魔境が悩乱して、あるいは年月を経て去らざれば、ただまさに端心正念にして堅固なるべし。身命を惜しまず憂懼を懐くことなかれ。まさに大乘方等の諸の治魔の呪を誦し、黙してこれを念誦し、三宝を存念すべし。もし禪を出でんときもまた、まさに呪を誦してみづから防ぎ、懺悔慚愧し、および波羅提木叉戒を誦すべし。邪は正を干さず、久久にしておのずから滅せん。

魔事は衆多なり。説けども尽くすべからず。よくすべからくこれを識るべし。この故に初心の行人は必ずすべ

『天台小止観』の研究(七) (大野)

からく善知識に親近すべし。かくのごとき等の難事あるがための故なり。

この魔が人心に入るとき、よく人をして心神を狂乱せしめ、あるいは憂いあるいは喜び、これに困つて患をなし、乃至、死を致す。あるときは諸の邪なる禪定、智慧、神通、陀羅尼を得しむ。説法し教化するに人みな信伏すれども、後にすなわち大いに人の出世の善事を壊し、および正法を破壊す。

かくのごとき等の諸異は一にあらず。説けども尽くすべからず。いま略してその要を示せるは、行者をして坐禪のなかにおいて妄りに諸の魔の境界を受けざらしめんがためなり。要を取つてこれをいわば、もし邪を遣つて正に帰せんと欲せば、まさに諸法実相を観すべし。よく止観を修すればこれすなわち邪として破せざるはなし。故に『釈論』にいわく、

「諸法の実相を除いて、その余は一切みなこれ魔事なり」

と。偈のなかに説けるがごとし。

「もし分別憶想すれば、すなわちこれ魔羅の網なり」

『天台小止観』の研究(七)(大野)

動ぜず分別せざるを これすなわち法印なりとなす⁽⁶³⁾

(注)

(1) 魔羅 Ⅱ「魔羅」は、サンスクリット語マールラの音写。魔と音略する。殺者、奪命、能奪命者、障礙と訳し、悪魔ともいう。人の生命を奪い、善事を妨げる悪鬼神である。古くは磨と書いたが、梁の武帝の時から、魔の字に改めた。「魔」という漢字は、「麻」と「鬼」を合わせて造つたもので、それが邪悪な存在であることを強調したものとされている。

仏教の魔は、キリスト教の悪魔と違って、邪悪な霊的な存在というより、人間が善を行なうのを妨げ、修行を妨害し、悪に誘う存在ととらえられている。魔とは、人間が善を行ない悟りを得るために修行しようとするのを妨げる内外の障礙を、擬人化したものである。障礙、妨げとなるのは、わたしたち自身の心のなかに生起する煩惱であり、貪り・怒り・愚かさ・慢りなど、心意識の自我のはたらきをいう。

『普曜経』巻第六には、仏陀が成道する時、魔王波旬が四女を遣わして悩ませたと伝えられ、『スッタニパータ』に、悪魔ナムチへの仏陀のことばが収められている。

「汝の第一の軍勢は欲望であり、第二の軍勢は不快であ

り、汝の第三の軍勢は飢えと渇きであり、第四の軍勢は渴愛といわれる。汝の第五の軍勢は心を暗く沈ませる心の作用であり、第六の軍勢は恐怖の心といわれる。汝の第七の軍勢は偽善と傲慢である。……ナムチよ、これが汝の私を攻撃する邪悪な軍勢である。勇敢ではない者は、それに打ち勝つことはできないが、勇敢な人(仏陀)は、それに打ち勝って安樂を得るのである。」(四三六―四三九頁)

また、『仏本行集経』巻第二十五には、仏が成道する以前の六年間の苦行中において、すでに欲界の魔王波旬が、仏の左右に近づき、入り込む隙を窺っていた。仏はこの魔王波旬に対して、

「我、当に久しからずして、汝、魔を降すべし。汝の軍の第一はこれ欲貪なり。第二は名づけて不歎喜となす。第三は飢渴寒熱等にして、愛著はこれ第四軍と名づく。第五は即ち彼の睡及び眠、驚怖恐畏はこれ第六、第七はこれ孤疑惑なり。瞋恚忿怒は第八軍、競利及び争名は第九にして、愚癡無知はこれ第十なり。自誉矜高は第十一にして、十二は恒常に他人を毀るなり。」

波旬よ、汝等の眷属然り。軍馬悉とくみな黒暗を行く。それこの悪行に墮すことある者は、これ彼の沙門・婆羅門なり。汝の軍は恒常に世間に行きて、一切の天人類を送惑せしむ。

我、今汝が軍馬を見れば、妙智慧をもつて勝兵を敵にし、悉とくよく降伏して余なからしめ、尽とく汝の大軍衆を破らんことを。なお水の坏やかない瓶器を破るが如く、汝の軍を消散せんこと亦た復た然らん。我が心正念にして安きこと山の如し。智慧も方便もみな成就し、無放逸の心をもつて行ず。汝、何ぞ能く我が瑕疵きずを得ん。」(『大正蔵』三・七六九c)

と説き、魔軍衆として十二軍を挙げる。何れも実在するものようであるが、五陰・十二入・十八界に基づく我見のはたらきを表象している。このように仏はすでに苦行中において、魔軍衆を降伏することを、おのれに誓願しているのである。降魔成道は、仏陀の成道が妨害されたという宗教史上の出来事というより、仏陀が内的なさまざまな心の葛藤を乗り越え、自らの心に打ち勝ったことを表わすことがよく分かる。

智顛も、仏陀の降魔成道と同じ体験をする。智顛は、太建七年(五七五)、建康の瓦官寺を出て天台山に入る。日毎夜毎、天台山を駆け回り、頭陀行を行っていた。ある夜、天台山の最高峰の華頂峰で、迫り来る無数無量の魑魅魍魎に悩殺される、恐怖の実体験をした。華頂峰上で、魑魅魍魎を降したこの実体験を、華頂開悟とも華頂峰の降魔一実諦ともいう(『隋天台智顛大師別伝』、『大正蔵』五〇・一九三b)。智顛にとつての魔は、仏陀の降魔成道の時と同じ

『天台小止観』の研究(七)(大野)

じ、断滅しても断滅しても、内心から湧き出て止むことがない煩惱であった。

魔の意味を内観的に解釈して、煩惱などすべて衆生を悩ますものを魔と名づける。自己の身心から生じる障礙を内魔といい、外界から加わる障礙を外魔といい、合わせて二魔とする。

『大智度論』巻第五には、魔について「復た次に、諸法実相を除いて、余残の一切の法を尽とく名づけて魔となす。諸の煩惱・結使・欲縛・取纏・陰界入・魔王・魔民・魔人の如し。是の如き等を尽とく名づけて魔となす」(『大正蔵』二五・九九b)と述べている。『大智度論』巻第五は、諸法実相を除く他のすべてを魔と規定している。第八章「魔事を覚知せよ」の魔・魔羅・魔事の根拠は、ここにある。

一切の煩惱や結使が、魔の根本原因である。人は、湧き出る煩惱や結使に動かされて、自我を造り出す。自我を造り出すということは、とりもなおさず魔の繫縛を受けることである。人は、造り出した自我心に束縛され、魔の手中に搦め取られていく。

こうして魔に取り憑かれると、人は、魔から自己を守る手立てとして、五陰・十二入・十八界の「陰入界」という、身体と身体を構成している要素が造り出す、主観と客観を心中に固定化させ、貪り・怒り・愚かさ・慢りなど固定化させた自我によって生きるから、いつのまにか魔がわれわ

『天台小止観』の研究(七)(大野)

れの全人格の中に入り込んで、われわれを支配し、おのれが、魔王となり魔人となってしまう。邪な見方に搦め取られ、邪な見方を正しい見方だと固定化し、自我心に塗れて正しいものの見方ができないと、自分の手で自分の首を締める結果となってしまう。この例は、巷に溢れている。

なお、魔に関することばを諸経典にみれば、魔羅・魔王波旬・大魔軍衆・魔天・魔女・魔三女・魔怨・魔戒・魔界・魔行・魔繫・魔障・魔業・魔網・魔網網・魔事・魔邪・魔精進・魔禪・魔檀・魔克・魔道・魔嬈・魔忍・魔縛・魔魅・魔民・魔人・魔網・魔羅道・五陰魔・煩惱魔・死魔・天子魔・罪魔・行魔・悩魔・業魔・心魔・三昧魔・善知識魔・不知菩提正法魔・失善根魔などがある。何れも人に障礙を与えるもので、転じて煩惱の異名として用いられる。

(2) 魔羅とは、秦には殺者という。行人の功德の財を奪い智慧の生命を殺すが故なり。この一句は、『大智度論』卷第六十六の、「魔は秦には、能く命を奪う者」とい、亦た死魔は実に能く命を奪うといえども、余も亦た能く命を奪う因縁をなす。亦た智慧の命を奪う。この故に殺者と名づく」(『大正蔵』二五・五三四a)によったものである。

「功德の財」は、仏道修行に励む者が、善を積み、修行を實踐した結果得られる功德を財産とみなすことをいう。

「智慧の命」は、煩惱を断つて自他救済を可能にする智慧を生命とみなすことをいう。智慧は、智頭の生命線である。

智慧があるから、自他の救済が可能となるが、智慧を失えば自他の救済の可能性を抹殺することになる。だから無分別智である智慧は仏性であり、如来蔵であり、従って最重要の生命であるとみなす。

従って一句は、サンスクリット語でいう「魔羅」は、中国では生命を断つものの意から「殺者」と呼ばれた。殺者と呼ばれるのは、魔は、仏道修行に励む者が善を積み、修行を實踐した結果得られる功德という財産を奪い去り、煩惱を断つて自他救済を可能にする智慧という生命を奪ってしまうからであるの意をいう。

(3) いかなるをか魔事と名づくるや。仏のごときは、功德・智慧をもつて衆生を度脱して涅槃に入らしむるを事となす。魔もまたかくのごとく、つねに衆生の善根を破壊して生死に流転せしむるをもつて事となす。もしよく心を道門に安んずるに、道高ければすなわち魔盛んなり。故にすべからくよく魔事を識るべし。この一句は、『大智度論』卷第五の、「慧命を奪い、道法・功德の善本を壊す。この故に名づけて魔となす」と説く文を根拠としている。魔は常に人々の善根を破壊し、智慧を奪い去り、道を求める心をも奪い去るものである。また人々をして生死流転させ、苦界から度脱させることはない。とくに心しなければならぬのは、悟境が深くなればなるほど、魔の悩乱もまた激しいということである。

「道門」は、修行の門、仏道修行の実践道をいう。ここでは、臍下三寸の丹田に心を落ち着け、心を一つの対象に專注する「止」の修行法と、自我を否定し、物事の実相を観察する智慧を引き出す「観」の修行法を実践することと取る。

「安ずる」は、置くことをいう。

「道」は、目的地に至らせる通路、踏み行なわなければならない道（軌路）をいう。

『俱舍論』巻第二十五には、道とは涅槃（悟り）に往く路であり、涅槃の果を求めるためのよりどころ（所依）であるとする。このように、主として仏教の究極目的を達成させるための修行の道程を意味するが、また広く果に趣かせる通路の意ともする。すなわち、ここでは、悟りの涅槃に往く、十信・十住・十行・十廻向・十地・等覺・妙覺という、五十二を数える仏教の究極の目的を達成させるための修行の道程をいうと取る。悟りを求めようとする心が高ければ高いほど、求める自利に執着する度合いが大きくなる。執着することが煩惱であり、自我であるから、執着する度合いが大きくなればなるほど、煩惱という心を悩まし成道を妨害する魔が、心に付け入る度合いも大きくなる。

おのれの利を求めるのとは逆に、布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智慧の六波羅蜜を行じる人は、他に利を与えることに徹する。六波羅蜜を行じることによって、自我に塗

『天台小止観』の研究（七）（大野）

れたおのれの心の粗大なはたらきは微細となり、やがて自分自身の救いを求めるおのれの自利の心は消滅する。おのれの心が消滅すれば、渴愛や執着によって狭く小さく閉ざされていた心は解放され、心の障礙となるものはすべて消滅する。つまり、六波羅蜜を修行実践することによって、捨てることに徹し、もっぱら他の人々の利益と救済に精進する利他に徹すれば、魔が入り込む余地はどこにもない。

従って、「もしよく心を道門に安んずるに、道高ければすなわち魔盛んなり」の一句は、菩薩道にある修行者が、止と観の修行実践の中に身を置いているとき、いくら六波羅蜜を実践して自我を克服し、広い心をもとうと修行を重ね、境界が高くなっても、他を利益する「捨」に徹することがなければ、魔のはたらきが旺盛となって修行者に付き従い、悟ったのか、魔を心に入れたのか分からないようになってしまふの意をいう。

(4) 魔に四種あり。一に煩惱魔、二に陰入界魔、三に死魔、四に鬼神魔なり。二に「魔・魔羅」は、内なる魔である。内なる魔は自我意識というカルマである。内なる魔は、おのれには害を加えても、第三者に害を加えるものではない。内なる魔は、すなわち己心中の煩惱である。

人々を悩ませる魔を内観として四つに分けて、意味を解説したものに「四魔」がある。一般的には、「四魔」は、煩惱魔・陰魔、死魔、化他自在天魔の四をいう。

『天台小止観』の研究（七）（大野）

(1) 「煩惱魔」は、欲魔ともいう。貪り・怒り・愚かさ・慢りなどの煩惱を始めとする百八の煩惱が、人々の心を悩まして、智慧の命を奪うのを魔とみたものをいう。

『大智度論』卷第六十八や『次第禪門』では、欲貪や不歡喜を始めとする魔軍衆十軍を挙げる。この魔軍衆が煩惱魔である。煩惱は、三毒を始めとする百八の諸煩惱を心中にもつことによつて、心そのものを魔軍によつて成り立たしめ、どこまでも自我構造の自己を形成する。徹底して自己を防衛し、敵対するものには、おのれの心の中の魔軍衆を動員して戦いを挑む、魔衆そのものとしての生き方をすることをいう。

(2) 「陰魔」は、五衆魔・五陰魔ともいう。人の身心を構成している、肉体の色蘊・感受作用の受蘊・表象作用の想蘊・意志作用の行蘊・認識作用の識蘊という五蘊が、自我を造り続け、種々の苦しみを生じ、衆生の仏性を害なうのを魔とみたものをいう。『天台小止観』では、「陰入界魔」という。『次第禪門』では、五陰・十二入・十八界の心のはたらきをもつことによつて、清浄の善根の功德や智慧を包み隠してしまう魔をいう。また、五陰のはたらきによつて、自我を造り続け、作つた一切に執着するから陰魔という。

(3) 「死魔」は、一般的には、死そのものを魔とみなしている。『次第禪門』では、修行中において、死を想念

したり、病や害を受けて生命の終わることをいい、常に生死・業報・輪廻の範疇にとどまることを死魔という。

『大智度論』卷第六十八によれば、この現実は無常であり、相続する肉体の色蘊・感受作用の受蘊・表象作用の想蘊・意志作用の行蘊・認識作用の識蘊という五蘊の寿命を破壊し、教・行・証の三法の識を離れて、寿命を断つから死魔という。

(4) 「化他自在天魔」は、天魔・自在天魔・天魔波旬ともいう。正しい教えを破壊し、人が死を乗り越えようとしたり、人が善行をしようとしたりするのを妨げる、欲界の第六天、すなわち化他自在天の魔王・天魔波旬をいう。『天台小止観』では、「天子魔」という。『次第禪門』では、天子魔は、仏法の怨敵であり、人々が魔界から出離することを阻止するため、魔王の眷属である魔衆によつて悩乱させ、善根を破壊するはたらきをなすものをいう。

「四魔」に罪魔を加えた、天魔（鬼神）・罪魔（罪惡）・行魔（無常）・悩魔（煩惱）・死魔（死）を、『寫意経』（『大正藏』一六・五三〇c）は、「五魔」とし、四魔に無常・無我などの四顛倒の心を加えて八魔とすることがある。

なお、『天台小止観』では(4)の化他自在天魔を「鬼神魔」とする。『天台小止観』のここでも、四魔の第四天子魔と

いう、一般の經典の表記を用いれば、当然、インド以来の欲界の化他自在天を問題としなければならぬ。ここでは、中国の鬼神を取り上げ、道教の鬼神に限定し、古来から中国の民衆の心に定着し固定化している、鬼神と対決をしようとした。だから、天子魔一般は横に置いて、道教の鬼神に限定して第四を鬼神魔としたのである。

修行者の境界が高くなればなるほど、魔が付け入り、簡単には悟ることはできないという、仏道実践上の有り様を説き、道教を点検した上で、道教の誤りを明らかにするために、第四の生死を超えようとする者を妨げる鬼神魔に焦点化している。

(5) 世の常の事Ⅱ「世の常の事」は、仏教の世界ではよく知られていることをいう。

(6) この事Ⅱ「この事」は、鬼神魔に悩まされ、乱されるすがたをいう。

(7) 鬼神魔におよそ三種あり。一には、精彪鬼、二には堆惕鬼、三には魔羅鬼なりⅡ「鬼神魔」は、生死を超えようとする者を妨げる鬼神を魔とみたものをいう。

「精彪鬼」は、時媚鬼・精媚鬼と同義。獣の精が、種々に変化して、修行を妨げる中国的な鬼神魔をいう。

「堆惕鬼」は、埤惕鬼と同義。修行者の身体の感覚器官に起こす感触によって、修行を妨げるインド的な鬼神魔をいう。

『天台小止観』の研究(七)(大野)

「魔羅鬼」は、人を悪に誘い、人の生命を奪い、善事を妨げる鬼神魔をいう。

三鬼神魔は、実在するものではないが、人の僅かな隙を伺つて、身心の中に入り込んでくる。一度入ったが最後、我々の身心を居住場所として、そこから決して出ることがない。

従つて一句は、鬼神魔には、普通三種類が挙げられる。一つ目は、獣の精が、種々に変化して、修行を妨げる精彪鬼であり、二つ目は、身体の感覚器官に感触を起こして、修行を妨げる堆惕鬼であり、三つ目は、人を悪に誘い、生命を奪い、善事を妨げる魔羅鬼であるの意をいう。

(8) 精彪とは、十二時の獣が、変化して種種の形色をなすなりⅡ「精彪」は、獣の精が、種々に変化して、修行を妨げる中国的な精彪鬼をいう。

「十二時」は、一昼夜、二十四時間をいう。

「十二時の獣」は、十二獣と同義。南閻浮提の外の四方の海中にある島の上の山に住む、十二種の獣をいう。鼠・牛・虎(獅子)・兔・竜・蛇・馬・羊・猿・鶏・狗・猪の十二をいう。

十二種の獣は、衆生を教化し救済するためにすがたを変えた菩薩の化身である。十二月中、常に一獣ずつ順番に交代して南閻浮提の中をへ巡り、衆生を教化するとされる。中国の十二支に当たる。「十二支」は、子・丑・寅・卯・

『天台小止観』の研究(七)(大野)

辰・巳・午・未・申・酉・戌・亥の呼称をいう。これを、
仏教経典に説く、鼠・牛・虎・兎・竜・蛇・馬・羊・猿・
鶏・狗・猪の十二獸に合せて、「ね」「うし」などの訓読
をする。

十二支に十二獸を合わせ、それに現在の二十四時間を当
てれば、子は鼠で、午前零時から二時まで。丑は、牛で、
午前二時から四時まで。寅は、虎(獅子)で、午前四時か
ら六時まで。卯は、兎で、午前六時から八時まで。辰は、
竜で、午前八時から十時まで。巳は、蛇で、午前十時から
十二時まで。午は、馬で、午後零時から二時まで。未は、
羊で、午後二時から四時まで。申は、猿で、午後四時から
六時まで。酉は、鶏で、午後六時から八時まで。戌は、狗
で、午後八時から十時まで。亥は、猪で、午後十時から十
二時までに相当する。

「形色」は、すがた形をいう。

従って一句は、その一は「精彪鬼」である。精彪という
鬼は、午前零時の子の刻の鼠、午前二時の丑の刻に始まり、
午後十時の亥の刻の猪に終わる、十二時の獸が種々に形を
変え、すがたを現わす鬼神魔であるの意をいう。

(9) あるいは少男、少女、老宿の形||「少男」は、少年を
いう。

「少女」は、少女をいう。

「老宿」は老年宿徳の略。徳を積んだ老人をいう。

従って一句は、少年のすがたや、少女のすがたや、老人
のすがたを取ることをいう。

(10) もしくよく占してすなわち恒にこの時をもちいて来たら
ば||「占」は、占察と同義。占いの法をいう。「占」は、元々
は龜の甲や牛の骨を焼き、そこにぼつと音をたててできる
割れ目の「卜」と、問いの意の「口」とから成り、卜に
よつて現われた吉凶を判断することをいう。ここでは、時
刻に応じて現出してきた幻覚を、自分の頭で観察し判断す
ることをいう。

従って一句は、出てきた幻覚を自分の頭で観察し判断し
て、一定の獸の幻覚がいつも一定の同時刻に現われるなら
ばの意をいう。

(11) 虫・蠅のごとく人の顔面を縁じて鑽刺すること瘡瘡た
り||「縁じて」は、所縁とすることである。すなわち、心
が外界の対象に向かうこと、心識が外的な対象を認知する
作用をいう。ここでは、人の顔面を目標けてほどの意であ
るから、人の顔面にまとわりついでる意と取る。

「鑽刺」は、錐を揉みながら穴をあけることをいう。ここ
では、錐揉みするように毒針を突き刺すことと取る。

「瘡瘡」の瘡は、痺れる病や少し痛むが原義。虫や蠅が人
の顔面に毒針を突き刺すと、後に毒素を残す。残った毒素
で痛痒かったり、ヒリヒリしたり、痺れたり、シカッと痛
みを感じる。ここでは、麻酔にかかったような痺れて痛い

状態をいうと取る。

従つて一句は、堆惕鬼が虫や蠍さそりが修行者の顔面にまとわりついて毒針を突き刺すように刺して、シカッとした痛みを感じさせたり痺れさせたりするの意をいう。

(12) 撃擡二撃擡一の撃も擡も同義。叩くことをいう。

(13) 喧鬧二喧鬧一は、やかましく騒がしいことをいう。

(14) 一心に二一心に一は、心を統一し集中してをいう。つまり、今まで堆惕鬼に悩まされ乱されていたことに気づいて心機一転、善なる悟りの方向に、心をすくとんと転換する有り様、決断の様相が「一心に」に込められている。

「一心」は、心に生起して止まない自我心に塗れた煩惱を対治するために、心を統一し集中して、散乱する自我心を真正面から見据え、煩惱を淘汰し対治する〈集中した心〉をいう。

天台教学では、一心三観、一心三智、一心三惑を説くが、〈集中した心〉である一心に、一切を空と観じ、仮と観じ、また空も仮も一であると観じる空観・仮観・中観の三観を、同時に実現するのが一心三観。空・仮・中の三観を一心に融合するので、起こす一切智・道種智・一切種智の三智も、また同時に一心に証して、前後の差別がないとするのが一心三智。空観・仮観・中観によって、それぞれ見思の惑・塵沙の惑・無明の惑の一を断ち切るとき、他も同時に断たれるというのが一心三惑である。一つの対象に集中し、自

『天台小止観』の研究(七)(大野)

我を対治する心が一心である。

「一念」は、心にあらゆるものが、悉とく欠けるところなく具わっている心を用いて、介爾けにの一念・陰妄おんもうの一念・介爾陰妄の一念・現前陰妄の一念等ともいわれる。

介爾陰妄の一念は、凡夫が、現実に起こす日常のかすかで弱い介爾の五蘊に属する迷いの一おもいの心である。「一念」は、まさに〈造作した心〉であるから、三千の数に表現される差別相を、一念の中に完全に包摂することができるのである。

三千の数は、迷っている者も悟っている者も含めた、すべての境地である十界が、互いに具わり合つて百界となり、その百界が実相に十種の面(十如是)を具えているから千となり、これが物と心との係わり合いの境地(衆生世間)と、さらに人間が住む場所・環境(国土世間)と、人間の存在を構成する要素(五陰世間)との、三種の世間にわたっているから三千の数となる。

この三千の数で表わされる一切の現象、宇宙の一切のすがたが、一念の中に完全に具わっているのは、一念がまさに〈造作した心〉であるからである。一念は、介爾の中に、無尽蔵の迷妄の五陰である陰妄のカルマ一切を、撰取し尽くしている一おもいの心であるといえる。

「一心」は、主として、観じる者の心を用いて、「一念」は、観じる対象をいうが、誤解を恐れず言えば、「一心」は、

『天台小止観』の研究（七）（大野）

悟りの方向（善）にある（集中した心）であり、「一念」は、迷いの方向（愚）にある（造作した心）」とするのが、両者の根底に流れる中心概念であるといえる。

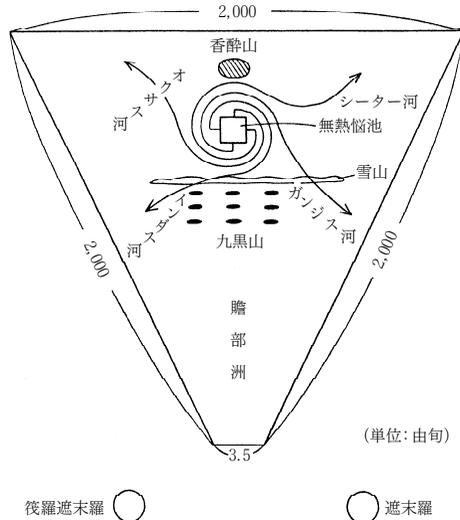
(15) 汝はこれこの閻浮堤の中で、火を食い香を嗅ぎ臘を偷める吉支なり。閻浮堤は、現実の人間世界、すなわちわたしたちが住むこの世をいう。

「火を食い香を嗅ぎ臘を偷める吉支」の臘を偷める吉支は、修行者が具足戒を受けて比丘・比丘尼になってからの年数、すなわち僧侶の法臘を盗み取って、僧侶に成り済ます鬼神魔をいう。つまり修行者の僧侶としての生命を奪い取り、修行者に僧侶を止めさせる堆悞鬼という鬼神魔をいう。なお、鬼神魔は、わたしの外にある魔ではなく、内なる魔、すなわち自我意識というカルマ、己心中の煩惱をいうことは言うまでもない。

従って一句は、お前は、この世で火を喰い、香を嗅ぎ、修行者の法臘を盗む悪鬼の吉支だの意をいう。

「閻浮堤」は、ジャンプ・ドヴィーパの音写。ジャンプの音写を瞻部、ドヴィーパの訳を洲とし、瞻部洲ともいう。古代インドの宇宙論である須弥山説という須弥四洲の一つで、人間が住む国土とされる。須弥山の南方にあるので南瞻部洲・南閻浮堤ともいう。

地形は、ほとんど三角形に近い台形で、北に広く南に狭い。下辺が二千由旬（由旬は約7km）、上辺が三・五由旬、



『俱舍論』に記された瞻部洲の図解

斜辺が各二千由旬とされる。島の北寄りに雪山（ヒマヴァット）が東西に走っており、その南には九黒山が三つずつ三列に並んでいる。雪山の北には、一辺が五十由旬の正方形の無熱惱池（アナヴァタブタ）がある。この池の周辺には、甘美な果実を実らせる瞻部（ジャンプ）という喬木が茂っていて、名の由来となっている。

また、この池を源として四つの大河が流れ出している。無熱惱池のさらに北には、様々な香を発するいろいろな種

類の樹が茂る香醉山（ガンダマダーダナ）があつて、香を食べ音楽を司る乾闥婆（ガルダルヴァ）神の住居であるといふ。

以上のような閻浮堤・瞻部洲のありさまは、明らかに現実のインドに基づいて構想されたもので、島の形はインド亜大陸の形状にそのまま合致する。また雪山はヒマラヤ山脈に、四大河はガンジス河、インダス河、オクサス河（アム・ダリヤ河）、シーター河（シル・ダリヤ河、ヤルカンド河？）に比定される。無熱惱池および香醉山は、チベットのマナサロワル湖（マダム湖）およびカイラーサ山（ティセ山）にあたると思われるが、無熱惱池については、砂漠のオアシスを神話化したものとする説もある。

なお閻浮堤・瞻部洲の南方東西に遮末羅（チャーマラ）、筏羅遮末羅（アヴァラ・チャーマラ）の二つの島がある。東側の遮末羅島は明らかにセイロン島（現在のスリランカ）に相当する。筏羅遮末羅島には対応するものがないが、均斉を重んじる意味で遮末羅島と左右対称の位置に配したものである。

諸仏は、この閻浮堤・瞻部洲にのみ出現するといわれ、閻浮堤・瞻部洲の住民が受ける楽しみは東、北の二島に劣るが、仏に遇い法を聞くことができる点ですぐれているとされる。

(16) 戒序Ⅱ「戒序」は、『梵網經盧舍那仏説菩薩心地戒品第

『天台小止観』の研究（七）（大野）

十、略して菩薩戒經、梵網菩薩戒經、梵網經』二巻の序（『大正藏』二四・一〇〇三a—b）をいうのであろうが、この序には堆揚鬼を対治するだけの内容があるとは思われない。だから、『梵網經』が説く梵網戒、すなわち大乘戒を口誦するのが妥当であろうと考える。従つて戒序は、下巻で菩薩の戒として詳述されている十重禁戒と四十八輕戒と取る。

「戒」は、サンスクリット語のシーラの訳。尸羅と音写する。しばしば行なうこと・行為・習慣・性格・道徳・敬虔などの意。善惡の療法についていい、よい習慣づけを善戒（善律儀）、悪い習慣づけを惡戒（惡律儀）ということがあるが、普通は淨戒（戒には清淨の意味がある）・善戒の意味に限つて用い、身体の行為と言語上の（身・語の）非を防ぎ惡を止めることをいう。

戒は、もと仏陀が仏教徒以外の宗教家・外道が行なつていた非行を、仏教徒に対して誡めたものである。在家と出家とに共通し、随犯随制ではなく、これを犯した場合の処罰の規定を伴わず、従つて自発的な努力を持つことを特徴とする。

これらの点において、元來、戒は律と区別されるべきものであつたが、後には両者は混同して用いられた。しかし一般には、戒は三藏の一である律藏の中に説かれているから、この点からいえば戒は律中に説かれている内容の一部

『天台小止観』の研究(七)(大野)

であり、律はその戒などを説く文言、典籍である。

小乗では、戒には在家・出家、男・女の別に応じて五戒・八戒・十戒・具足戒(五八十具と略称)の種類があるとす。大乘では、これらをすべて声聞戒(小乗戒)と称し、別に大乘の菩薩のための菩薩戒(大乘戒)があるとす。これら両者を合わせて二戒という。

また、仏がその戒を制定しなくても、本来的な性質として罪悪であるもの・性罪を制止した戒を性戒という。これに対して、それ自らは本来罪悪ではないが、世間の非難を避けるため、あるいは他の性罪を誘発させないために、仏が特に制定した戒めを遮戒という。遮戒によつて遮制される罪悪を遮罪という。合わせて二戒とする。例えば、殺生戒や偷盜戒は性戒で、飲酒戒は多くは遮戒とされる。

〔十重禁戒〕は、十重・十重禁・十重戒・十無尽戒・十重波羅堤木叉・十波羅夷・十不可悔戒ともいう。大乘戒における最重罪で、大乘の菩薩がこれを犯すときは、破門罪、追放罪(波羅夷)を構成する。

十重禁戒は、『梵網經』卷下に、四十八輕戒に先立つて説かれている。十重禁戒と四十八輕戒の五十八戒は、古來、梵網大戒とも仏戒とも呼ばれ、大乘菩薩戒として尊ばれている。

- (1) 殺戒——生きものを殺すことを禁じる仏の戒め。
- (2) 盜戒——与えられていないものを取ることを禁じる仏

の戒め。

- (3) 婬戒——婬欲を制する仏の戒め。

- (4) 妄語戒——偽ることなかれという仏の戒め。

- (5) 酤酒戒——酒を造り売買することに対する仏の戒め。

- (6) 説四衆過戒——在家・出世の菩薩、比丘・比丘尼の罪過を説くことに対する仏の戒め。

- (7) 自讚毀他戒——自らを讚め他をそしめることに対する仏の戒め。

- (8) 慳惜・加毀戒——財や法を施すのを惜しむことに対する仏の戒め。

- (9) 瞋心不受悔戒——怒つて、相手が謝つても許さないことに対する仏の戒め。

- (10) 謗三宝戒——仏法僧の三宝をそしめることに対する仏の戒め。

の十で、これらを自ら行ない、あるいは他に行なわせるように戒めたものである。

〔四十八輕戒〕は、四十八輕ともいう。『梵網經』卷下に説く大乘戒のうち、重罪である十重禁戒(十波羅夷)に対して、輕罪である四十八の輕垢罪(清淨行を汚す輕い罪、波羅夷に対する)をいう。

- (1) 師友を敬わないことに対する戒め。

- (2) 酒を飲むことに対する戒め。

- (3) 肉を食うことに対する戒め。

- (4) 葷臭くんじゅうのある食物である五辛ごしんを食うことに對する戒め。
- (5) 人の罪を指摘して懺悔ざんげさせることをしないことに對する戒め。
- (6) 法師に供養して法を請うことをしないことに對する戒め。
- (7) 怠けて経律を聞かないことに對する戒め。
- (8) 大乘に背き、小乗の赴くことに對する戒め。
- (9) 病者を看病しないことに對する戒め。
- (10) 武器を保持することに對する戒め。
- (11) 国賊的行為をして、戦争の因を作ることに對する戒め。
- (12) 人身・六畜・葬具などを売ることに対する戒め。
- (13) 他人を誹謗することに對する戒め。
- (14) 放火に對する戒め。
- (15) 小乘・外道の教えを人に説くことに對する戒め。
- (16) 利益のため、教法を歪曲して説くことに對する戒め。
- (17) 官權に近づいて利を貪ることに對する戒め。
- (18) 知解なくして人の師となることに對する戒め。
- (19) 両舌によつて持戒の僧を謗ることに對する戒め。
- (20) 衆生の死苦を見ながら、これを救わないことに對する戒め。
- (21) 瞋恚によつてあだを報じることに対する戒め。
- (22) 橋慢で、教えを請わないことに對する戒め。
- (23) 橋慢で、後輩を輕蔑し、法を誤つて教えることに對する戒め。
- (24) 佛法を学ばず、かえつて外道・異学を学ぶことに對する戒め。
- (25) 衆を導き、三宝を守ることを怠ることに對する戒め。
- (26) 供養を受け、独り貪つて人に分けなないことに對する戒め。
- (27) 十方の僧団に属するものを私有物とすることに對する戒め。
- (28) 檀越などが僧を別請することに對する戒め。
- (29) 邪惡な方法により生活することに對する戒め。
- (30) 非法を行なうことに對する戒め。
- (31) 尊ばるべき人や物が危險に瀕しているのに救護くごしないことに對する戒め。
- (32) 種々な方法で衆生に損害を与えることに對する戒め。
- (33) 喧嘩・遊戲・歌舞などを見聞することに對する戒め。
- (34) 菩提心を退転することに對する戒め。
- (35) 好師問学を求めないことに對する戒め。
- (36) 十大願を起こし、勇猛に精進することを怠ることに對する戒め。
- (37) 危險を冒して頭陀行を行じることに対する戒め。
- (38) 上下尊卑の次第を乱すことに對する戒め。
- (39) 経律を講じ、福德を修めることを怠ることに對する戒め。

『天台小止観』の研究(七)(大野)

(40) 授戒する時、七逆罪を犯した者以外において人を選ぶことに對する戒め。

(41) 利養のためにいつわつて師となることに對する戒め。

(42) 外道悪人のために戒を説くことに對する戒め。

(43) 自ら破壊無慚にして布施を受けることに對する戒め。

(44) 經典を敬重供養しないことに對する戒め。

(45) 衆生を教化せず、大悲を行じないことに對する戒め。

(46) 教法を侮るような者に法を説くことに對する戒め。

(47) 国王・太子などが權勢によつて非法を行なうことに對する戒め。

(48) 国王などが權力によつて、佛法を破壊することに對する戒め。

(17) 三帰・五戒・八戒等を誦すべし。先ず帰依仏・歸依法・

歸依僧の三歸文を唱え、次に不殺生戒・不偷盜戒・不邪淫

戒・不妄語戒・不飲酒戒の五戒を唱え、続いて不殺生戒・

不偷盜戒・不邪淫戒・不妄語戒・不飲酒戒・離眠坐高広

嚴麗牀座戒、離塗飾香鬘離舞歌觀聽戒・離非時食戒の八

戒などを唱えなさいの意をいう。

〔三帰〕は、三歸依・三自歸・三帰戒ともいう。仏・法・

僧の三宝に歸投依憑して救護を請う意。歸依仏・歸依法・

歸依僧の三をいう。なお、歸依は、信心の誠を捧げること

をいう。〔五戒〕は、在家の仏教信者が守るべき五つの戒めをいう。

(1) 不殺生戒・殺生戒——いきものを殺さないという戒め。

(2) 不偷盜戒・偷盜戒——盗みをしないう戒め。

(3) 不邪淫戒・邪淫戒——男女の間を乱さないという戒め。

(4) 不妄語戒・妄語戒——嘘をつかないという戒め。

(5) 不飲酒戒・飲酒戒——酒を飲まないという戒め。

〔八戒〕は、八戒齋・八戒戒の略。一日戒・近住戒・近

住律儀(近住とは阿羅漢に近づいて住するの意)ともいう。

一日一夜を限つて男女の在家信者が守る八つの戒めをい、

出家生活を一日だけ守るといったものである。

不殺生戒、不偷盜戒、不邪淫戒、不妄語戒、不飲酒戒の

五戒に、

(6) 離眠坐高広嚴麗牀座戒——高座に坐り、好床に臥さな

い。

(7) 離塗飾香鬘離舞歌觀聽戒——身に香油を塗らず、装身

具を付けず、演劇などの催物を見ない。

(8) 離非時食戒——正午を過ぎてから食事をとらない。

という住・衣・食の贅沢に對する戒めを加えて八とする。

これをウポーサタの日、すなわち毎月陰曆の八日・十四

日・十五日・二十三日・二十九日・三十日に守つて行なう。

(18) 鬼はすなわち却行し匍匐して去らん。〔却行〕は、後

ずさりすることの意をいう。

〔匍匐〕は、地に伏して手と足とで這い進むこと、腹ばい

になつて進むことの意をいう。

「去」は、消失すること、一目散に逃げ去ることの意をいう。

従って一句は、堆惕鬼は腹ばいになって後ずさりして消えていくの意をいう。

なお「一心閉眼、陰而罵之、作如是言。我今識汝、汝是此閻浮提中、食火嗅香、偷臘吉支、邪見喜破戒種、我今持戒、終不畏汝。若出家人、応誦戒序、若在家人、応誦三帰、五戒八戒等、鬼便却行、匍匐而去」は、『治禪病秘要法』二卷(『大正蔵』一五・三四一b)の引用。

(19) 「留難」は、堆惕鬼のような鬼神魔が入り込んで、人の善事をとどめ、修行を妨げることを用いる。

(20) 「禅経」は、禅定を説く経典をいう。一般には、『修行道地経』『坐禅三昧経』『達摩多羅禅経』などがあるが、天台教学では『治禪病秘要法』二巻を用いる。

なお、ここで「余断除之法、如禅經中広説」とあるのは、『治禪病秘要法』二巻(『大正蔵』一五・三四一a—三四二b)に詳述されていることをいう。

(21) 三種の五塵の境界の相を化作し「三種」は、一句に続いて出る「違情の事を作す」「順情の事を作す」「非違非順の事を作す」の三種をいう。

「五塵」は、人の心に煩惱を起こさせて心を汚す様子が、まるで塵埃(じんあい)のような色塵・声塵・香塵・味塵・触塵の五をいう。五塵は、眼根・耳根・鼻根・舌根・身根の五官

『天台小止観』の研究(七)(大野)

の対象となる、客観の対象であるから、色境・声境・香境・味境・触境の五境と同義。

「境界」は、感覚器官による知覚・認識作用の対象、すなわちすがたや形がある対象をいう。従って「五塵の境界」は、客観の対象である色境・声境・香境・味境・触境の五境と同義と取る。

「相」は、すがたや形をいう。

「化作」は、一般的には、神通力によって造り出すことをいう。ここでは、身を変えることの意と取る。

従って一句は、魔羅鬼は、修行者に、嫌い・好き・そのどちらでもないという三種の感情を起こさせる、色や形がある眼の対象や、耳で聞く音声・鼻で嗅ぐ香・舌で味わう味・皮膚に触れる感触という、五種類の知覚・認識対象のすがたに身を変えるの意をいう。

(22) 二には、順情の事を作す。すなわちこれ愛すべきの五塵を作して、人の心をして愛着を生ぜしむ「順情の事」は、五塵を対象として、知覚・認識作用である五識が造り出す感情を、素直に受け入れられることをいう。

因みに、「違情の事」は、五塵を対象として五識が造り出す感情に馴染めず、嫌だと思ふこと、到底受け入れられないことをいう。そして「非違非順の事」は、違情に非ず順情に非ざること、違情でもなければ順情でもないことをいうから、気持ちに添わないのでもなく添うのでもない意

『天台小止観』の研究(七)(大野)

と取る。

「愛」は、十二縁起の第八支の愛をいう。愛は、サンスクリット語トリシュナーの訳。あたかもどが渴いた者が水を求めてやまないように、欲望の満足を強く求める心をいう。渴愛とも訳される。

愛に、欲愛(性欲・情欲)・有愛(生存欲)・非有愛(無有愛とも、生存を否定しようとする欲望)の三愛がある。また、欲愛・色愛(物質に対する欲望)・無色愛(物質を超えた欲望)の三愛がある。

また、色・声・香・味・触・法の六境に対する、色愛・声愛・香愛・味愛・触愛・法愛の六愛・六愛身がある。十二縁起の第八支の愛はこのような愛をいう。

「愛着」は、前出の渴愛と同義。のどが渴いて水を求めるような、貪り求める心、妄執をいう。

従って一句は、第二は、色や形や、音声・香・味・感触を対象として、眼・耳・鼻・舌・身の知覚・認識作用が造り出す感情が、修行者の気持ちに添い、素直に受け入れられるものである。魔羅鬼は、修行者が好んで受け入れ、受け入れたものに執着し、貪り求めて止むことがない色や形や、音声・香・味・感触という知覚・認識対象のすがたに身を変え、修行者の心をこれらの対象に執着させ、対象から離れられなくするの意をいう。

(23) 魔を殺者と名づけ「殺者」は、『大智度論』巻第六十

六の、「魔は秦には、能く命を奪う者といひ、亦た死魔は実に能く命を奪うといえども、余も亦た命を奪う因縁をなす。亦た智慧の命を奪う。この故に殺者と名づく」(『大正蔵』二五・五三四a)による。

(24) 一つの色のなかに三種の境界をなして行者を惑乱す「二色」は、ここでは「二つの色」と訓む。色は、色と形がある視覚対象の物質的現象をいう。従って一つの色は、一つの対象と取る。

「境界」は、諸感覚器官による知覚の対象・認識の対象をいう。従って「三種の境界」は、前出の受け入れやすい対象・受け入れがたい対象・そのどちらでもない対象をいう。「境界をなして」は、この三種に分別する心を起こすことをいう。

従って一句は、修行者は、一つの対象を見ると、それが受け入れやすい対象か、受け入れがたい対象か、そのどちらでもない対象かの、三種のどれかに分別し、分別した対象のすがたを見て惑い乱れるの意をいう。

(25) 諸仏の形像「形像」は、一般的には、彫像・肖像、人物のすがたをいう。ここでは、仏の身体に具える、頂成肉髻相・身毛右旋相・眉間白毫相を始めとする三十二の相好・よきすがたを具えた諸仏のすがたをいう。

(26) 従って一句は、諸仏の三十二のよきすがたの意をいう。みなこれ魔事なり。その相は衆多なり。具さには説く

べからずⅡ「魔事」の実例として、父母・兄弟・諸仏のよ
きすがた・端正な男女のような好ましいすがたや、虎・狼・
獅子・羅刹のような恐ろしいすがたや、普通のすがたや、
あるいは心地よい音声や心地悪い音声、芳しい香や嫌な香、
よい味や悪い味、苦しいことや楽しいこと、霊が身体に触
れるような思いなど、魔羅鬼の仕業の具体を挙げている。
しかしこれは、魔羅鬼の仕業とされる魔羅鬼が現実中存在
し、実在する魔羅鬼がしてかす仕業をいうのではない。そ
うではなく、私たち一人一人の心が、眼で見る対象に感
ずられて造り出す幻覚である。耳で対象を聞き、鼻で対象を
嗅ぎ、舌で対象を味わい、皮膚に対象が触れるたびに、幻
覚を実在するとするおのれの自我が対象を造り出していく
のである。自我が造り出した好き・嫌い・そのどちらでも
ないという思いにとらわれ、思いに実体があると執著し、
思いに妄執していく。

私たちは、日常の生活の中で、眼がとらえ、耳が聞き、
鼻が嗅ぎ、舌が味わい、皮膚が感触を受けるたびに、
対象の好き・嫌い・そのどちらでもないを造り出し、執著
するから、人の心に生起し、保持する対象を知覚し、認識
していく営みは、跡を絶つことがない。一句は、このこと
をいう。だから、魔羅鬼の仕業と象徴的比喩的に説く、人
の自我が造り出し、造り続け、累積していく人間の営みは
絶えることがない、だから、具体的にすべてを網羅して説

『天台小止観』の研究(七)(大野)

き示すことはできないと、一句はいう。
従って一句は、これらはすべて、仏道修行の妨げとなる
魔羅鬼のしわざである。魔羅鬼のしわざはおびただしい数
に上るから、一つひとつを説き尽くすことはできないの意
をいう。

(27) 善法Ⅱ「善法」は、十善をいう。十善は、十善業・十
善道・十善業道・十善根本業道・十白業道などともいう。
十善は、身・口・意の三業のうちで、顕著ですぐれた善の
行為をいう。この逆が十悪である。十悪は、殺生(断生
命)・偷盗(不与取、劫盜)・邪淫(欲邪行、邪欲)・妄語
(虚誑語、虚妄、いつわり)・両舌(離間語、破語。人の中
を裂く二枚舌)・悪口(麁惡語、惡語、惡罵。きたないの
のしりことば)・綺語(雜穢語、非応語、散語、無義語。ま
ことに背いておもしろくつくったことば)・貪欲(貪、貪
愛、貪取、慳貪)・瞋恚(瞋、恚害。怒りうらむこと)・邪
見(愚癡。まちがった見解)の十である。

これらを離れる行為が十善である。十善は、順次に身業
に属するものが三、口業に属するものが四、意業に属する
ものが三であるから、これらを身三口四意三と教える。

(28) よく平等の仏法を破壊しⅡ「平等」は、一般的には、無
差別の世界をいう。つまり、心と仏と衆生との三に全く差
別のないこと、すなわち心と仏と衆生との三つは、本質に
おいて異なつたものでないことをいう。差別のない平等は、

養虚称は九 自らを高くし人を蔑むは十なり かくのごとき等の軍衆 出家の人を厭没す われ禅智の力をもって汝がこの諸軍を破し 仏道を成ずることを得おわつて 一切の人を度脱す 一「欲」は貪欲をいい、妄執・愛著の義をいう。人が、自我意識の故に、色・声・香・味・触の五境に愛著するのを五欲という。対象に愛著しなければ煩惱が起きることがない。しかし人は、見るもの・聞くもの・嗅ぐもの・味わうもの・触るものに愛著してやまない。この愛著を魔羅鬼の第一の仕業とする。

愛著したものが手に入らないから憂愁が起きる。同様に、憂愁から飢渴が、飢渴から渴愛が、渴愛から睡眠が、睡眠から怖畏が、怖畏から疑悔が、疑悔から瞋恚が、瞋恚から利養虚称が、利養虚称から自高蔑人という煩惱が連鎖して生起する。愛著から起こり続けていく煩惱を、魔羅鬼の軍勢に例え、十軍を数える。

欲・憂愁・飢渴・渴愛・睡眠・怖畏・疑悔・瞋恚・利養虚称・自高蔑人の十は、仏道を修行実践しようとしている修行者に生起してやまない煩惱であるが、十は、魔羅鬼に魅入られたように、次から次へと湧き上がつてきて際限のない煩惱であり、強力に人を繫縛する煩惱である。だからこれを、恐ろしい魔羅鬼に例えている。欲は、ここでは煩惱の大本の、修行者が起こす執著と取る。

「汝」は、仏陀が教えを説く対告衆を始めとする仏弟子た

『天台小止観』の研究(七)(大野)

ちをいう。

「渴愛」は、のどが渴いて水を求めるような貪りの心をいう。欲の執著より更に激しい執著をいう。

「睡眠」は、心を晦まし鈍重にする眠気をいうが、ここでは、求めても求めても得られないから、やる気を失い眠る状態にある心と取る。

「瞋恚」は、心身を熱惱させ悪行を起こさせる怒り・憎悪をいうが、ここでは求めても求めても得られず、自分の心に違うものをいかり恨む心と取る。

「利養虚称」の利養は、財を貪り自分を肥やし自分の地位を上げようとするをいい、虚称は、実体がない自分を褒め称えることをいう。一句は、財を貪り名譽を求めようとする心をいう。

「自高蔑人」の自高は、自矜高じけいこうという自ら高ぶること、思しい上がることをいい、また、増上慢じやうじやうまんといういまだ悟つてもないのに、悟つたと思つて驕り高ぶることをいう。従つて一句は、悟つたと自ら高ぶり人を蔑あはすむ心と取る。

「厭没」は、出家の修行者を厭い、その生き方を根底から徹底して滅ぼそうとすることをいう。

「我・われ」は、仏陀をいう。

「成仏道」は、仏道を成ずると訓み、修行を完成することをいう。「道」は修行をいう。

「度脱」は、生死の苦海を渡り悟りの彼岸に到ること、煩

悩の束縛から解放し苦の世界から楽の世界へ渡ることをいう。

『仏本行集経』卷第二十五の、「汝軍第一是欲貪 第二名為不歡喜 第三飢渴寒熱等 愛著是名第四軍 策(第)五即彼睡及眠 驚怖恐畏是第六 第七是於孤疑惑 瞋恚忿怒第八軍 競利及爭名第九 愚癡無知是第十 自嘗矜高第十八 十二恒常毀他人……我心正念安如山 智慧方便皆成就 無放逸心而行行 汝何能得我瑕疵」(『大正藏』三・七六九c)の引用および取意。

(31) 行者すでによく魔事を覚知せば、すなわちまさにみずからこれを却くべし。『覚知』は、完全に知ることをいう。ここでは、自覚するほどの意と取る。

「却く」は、しりぞくと訓む。絶対に取り除くことをいう。魔羅鬼のなすわざに例えて説き示している、欲・憂愁・飢渴・渴愛・睡眠・怖畏・疑悔・瞋恚・利養虚称・自高蔑人の十は、人の自我意識が造り出し続けてやまない煩惱である。もし十を数える煩惱を取り除くことができなければ、人は永劫に自我の束縛の中で生きなければならぬ。すなわち、魔羅鬼の十の軍勢の命令に唯々諾々と従って生きることになる。人の生き方は、魔羅鬼の軍勢の支配下にあるべきではない。だから、十の魔羅鬼のなすわざは絶対に取り除かなければならない。「却く」はこの絶対否定をいう。従って一句は、修行者が仏道の妨げとなる、魔羅鬼のし

わざを自覚したならば、自分の力でこれらの魔羅鬼のしわざを絶対に取り除かなければならないの意をいう。

(32) 一切の外の諸の好悪の魔境を見ては「外」は、外境と同義。外界の対象、すなわち色・声・香・味・触の五境という、自我の目から見て差別のある対象世界をいう。

「好悪」は、好き嫌い、好ましいと見たり好ましくないと思たりする、取捨分別による執著・妄執をいう。

「魔境」は字義通りでは、魔羅鬼の境地をいう。ここでは、人を構成している五つの要素、色蘊・受蘊・想蘊・行蘊・識蘊のうち、人の認識を持続させる主体である識別・認識作用の識蘊が、好きか嫌いかの一方に片寄り、とらわれ、妄執し、識蘊が対象をあるがままに平等に見ることができない自我に塗れた境地を、すなわち自我によつて造り出された対象世界を、象徴的比喩的に魔羅鬼の境地すなわち魔境という。

従って一句は、自我に塗れた目で、外界の対象が独自のすがたで存在していると見、独自のすがたで存在していると見るものを、好ましいと見たり好ましくないと見たりすることはこの意をいう。

(33) 虚誑なりと知つて「虚誑」は、一般的には、いつわりをいう。ここでは、あらゆる現象的存在は空であり、実体がないのが真実であるのに、自我に塗れた心は、一切に固定的不変な独自の実体があることを真実と見る。一切に

固定的不変な独自の実体があると見ることを真実だとすることを、象徴的に、魔羅鬼が造り出すしわざとする。虚誑は、真実に違ふことをいう。

従つて一句は、魔羅鬼が造り出す真実に違ふしわざであるとするの意をいう。

(34) 心を息して「息」は、終息や息災の息の義。やめること、滅ぼすことをいう。

従つて一句は、外界の対象に執著する心の運転をやめること、すなわち外界の対象に心を移さないことをいう。

(35) 上に説けるところの「ごとき種種の魔境を見て」「上」は、これまでに説き明かされてきた、業・カルマを造ることによつて起こる魔境、実体化された魔羅鬼のしわざをいう。

従つて一句は、これまでに説き明かしたような、魔羅鬼のしわざとされる自我によつて造り出される対象世界をみたときの意をいう。

(36) すなわちまさに能見の心を反観すべし「能見の心」の能見は、真実が本来、平等一味・無差別であることを、そのままに覚知できない迷妄によつて、対象に執著する自我心が起きるとき、そこにはたらく、われわれの心中の種々の境界を映現する意志的作用をいう。ここでは、能見の心は、観る心、すなわち外界の対象を見るおのれの心の意と取る。

『天台小止観』の研究(七)(大野)

「反観」は、観が対象を観ることをいうのに対して、対象から観ること、本来の自己に戻つて、おのれが本来もつていける智慧で見るとの意をいう。

従つて一句は、外界の対象を見るおのれの心を、おのれが本来もつている智慧で観なければならぬの意をいう。

(37) 処所を見ざれば、彼はなんの悩ますところぞ「処所」の処は、眼・耳・鼻・舌・身・意の六の感覚器官と、その対象である色・声・香・味・触の六の主観と客観の十二処をいう。所は、十二処に、眼・耳・鼻・舌・身・意の六つの識別・認識作用を加えた十八界をいう。

つまり、個人存在を構成し、よりどころとなる主客すべての世界をいう。

「彼」は、魔羅鬼をいう。

従つて一句は、もし魔羅鬼がよりどころとする対象世界がなく、魔羅鬼が対象世界を見ることがなければ、どうして魔羅鬼が修行者を悩ますことができるだろうかの意をいう。

(38) 尋いで「尋」は、ついでと訓む。時間的な間を置かないで即座に、すなわち心に隙を造らないで即座にの意をいう。

(39) 遲遲として「遲遲として」は、のろのろした様子、ぐずぐずした様子をいう。ここでは、能見の心を反観できず、外界の対象にとらわれて、修行が前に進まないときにはの

『天台小止観』の研究(七)(大野)

意を内意する。

(40) 正念にして「正念」は、八正道の一の正念をいう。正しい努力の「正精進」の意識的な面をいい、仏教の真実を自覚した正しい見解である「正見」という目的を、常に心を正して心に留めて忘れないことをいう。

従って一句は、深く真実を思念して、すなわち一切は現象しているという真実を深く思念しての意をいう。

(41) 魔界の如はすなわちこれ仏界の如なりと知るべし。「魔界」は、魔境と同義。自我によって造り出された対象世界を、象徴的比喩的に魔羅鬼の世界としたものをいう。

「仏界」は、仏国土と同義。仏の世界をいうが、仏界も自我によって造り出された対象世界である。

「如」は、真実のありのままのすがた、すなわち一切は現象することをいう。

従って一句は、魔羅鬼の世界も仏の世界も本質的には同一であるから、魔の世界がそのまま仏の世界であると思ひ至るの意をいう。

「魔界即仏界」は、『摩訶止観』(『大正蔵』四六・一一六b)に出る一句。私たちは、魔の世界がどこかに存在し、仏の世界がどこかに実在すると考えるのが常である。しかし仏教は無常を説き、空を説き、無我を説き、縁起の理を説く。魔の世界も仏の世界も一切は心の現象に過ぎない。一切が現象することが「如」である。人が魔の世界を造る。

人が自我によって心の中に魔の世界を造り、魔の世界を実在化し、実在化させた魔の世界に恐怖する。同様に人は、仏の世界も心の中に造る。

魔の世界がわたしの心の中で現象するように、仏の世界もわたしの心の中で現象する。共に、固定的不変な独自の实体がない。魔の世界も仏の世界も、本質的には心の現象に過ぎず、現象という面で全く同じである。どちらも現象であって、まったく平等であることを、「魔界即仏界」という。現象としてあらゆる存在は、そのまま真実在のあらわれであり、存在するものがすべて真実の相一色であるから、すべての世界に差別相はない。すべての世界が平等相にある。「魔界即仏界」は、これをいう。

「魔界如即是仏界如」の出典は、『仏説首楞嚴三昧経』卷下に、「爾時天女以無怯心語惡魔言。汝勿大愁。我等今者不出汝界。所以者何。魔界如即是仏界如。魔界如仏界如不二不別。我等不離是如。魔界相即是仏界相。魔界法仏界法不二不別。我等於此法相不出不過。魔界無有定法可示。仏界亦無定法可示。魔界仏界不二不別。我等於此法相不出不過」(『大正蔵』一五・六三九c)

「如」は、サンスクリット語タター、あるいはタタターの訳。語義からいえば、如は、単にありのままを意味するに過ぎない。

仏教では、この語を普遍的真理、あるいは万有の真実相

の意味で使用する。すなわちあらゆる差別相を超えて平等一味なるものであり、思惟も言語も及ばないものとされる。間断なく生起し、種々に変化していく現象と不一不異の關係にありながら、しかも不変にして真実なるありのままのすがた、これを如・真如と呼ぶ。

タタターの漢訳の初期には、中国人に理解しやすいように「本無」という老莊が説く虚無自然の要素が濃厚な訳語その他があつた。羅什はこれに対して、中国古来の思想内容がない「如・如如・大如」という訳語を当てた。菩提流支あたりから「真如」が多く使われるようになり、玄奘に至つて訳語として定着したとされる。

大乘以前でも化地部では、善・悪・無記・八正道・縁起の五種の法を真実不変なものとして真如とし、阿含でも、縁起の理法が永遠不変の真理であることを、真如としたとされる。

しかし、如・真如の語が重要な概念として取り上げられ展開したのは般若經典である。般若經典では、一切皆空の立場から、一切の法が一味平等のものとして観じられる如来の内証の世界を提起し、これを真如とした。いわば仏の智慧の光によつて照らし出される世界全体を如・真如とした。

般若經典以後、真如の語は重視され多用されるのであるが、同じく真如といひながらも、それぞれ思想的立脚地が

『天台小止観』の研究(七)(大野)

異なることから、その意味内容に差異がある。

地論宗では、第八阿梨耶識、摂論宗では、第九阿摩羅識はそれ自身が清らかな自性清浄心、すなわち真如であるとし、その識が無明の薰習を受けて染浄の諸現象を現わすとする。

華嚴宗では、本来即現象を性起説によつて説き、真如そのまゝが万法、万法そのまゝが真如であるとす。

『仏地経論』巻第七には、真如とは、すべての現象(諸法)の実性であるとし、その体は一味であるが、相によつて種々の相があり、一切法と不一不異でその体を示そうとすれば、思考も言語も及ばないが、すべての偽りや誤つた見解を離れている点から仮に真如とする。

『解深密経』巻第三では、流転真如、実相真如、了別真如、安立真如、邪行真如、清浄真如、正行真如を説き、真如と心の関係の考察をさらに推し進めたものが如来蔵の思想である。

『宝性論』では『摂大乘論』と同様、如来蔵・仏性を有垢真如、法身・菩提を無垢真如と捉え、それぞれ本性清浄と離垢清浄と規定した。

『大乘起信論』では、真如を衆生心の本体であると説き、永遠不変の相において把握されるとした。この心真如は仏陀の心であるが、『起信論』はこれがすでに凡夫衆生にも具わっているという。つまり、この心真如が無明の縁に

『天台小止観』の研究（七）（大野）

従つて、染淨の現象として現われるのが心生滅であり、凡夫の心だとする。このように心真如の不変と隨縁という二面からおさえて究明したのが如来藏縁起の思想である。

日本仏教になると、心と真如との関わりは、さらに拡張され、行住坐臥、万事に我が身すなわち真如なりと観じ、これをもつて心想を絶し煩惱を伏滅するという観法が成立することになる。源信の真如観がそれである。

智顛は、性具説を説いて、真如そのものにも本来的に染淨善惡を具えているとする。『法華経』方便品の「唯だ仏と仏とのみ、乃し能く諸法の実相を窮尽す。所謂諸法の如是相・如是性・如是体・如是力・如是作・如是因・如是縁・如是果・如是報・如是本末究竟等なり」と説く、十如は、十如の文に基づいて、すべての存在（諸法）のありのままのすがた（実相）には、十種の如是とされる真実相があるとする。

そして、地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上・声聞・緣覚・菩薩・仏の十界が、相互に十界を具えているから百界となり、その百界が如是相・如是性・如是体・如是力・如是作・如是因・如是縁・如是果・如是報・如是本末究竟等の十如を具えて、合わせて千如となるという。

この十如は、前出の「魔界即仏界」を根拠とする十界・十法界と合わせて、天台教義の「一念三千」の根拠となるものである。十如はのうち、相とは相状の意で外的な形相、

性とは不改の意で内的な本性、体とは相や性を属性としてもつ主体、力とは体が具えている潜在的な能力、作とはそれが顕現して動作となったもの、因とは直接的原因、縁とは間接的条件、果とは因と縁とから生じた結果、報とはむくい、以上の因縁果にむくわれた後世の報果、本末究竟等とは本は相、末は報で、以上の如是相から如是報までの帰趨するところは結局同一で実相に他ならないことを本末究竟等とする。

以上、「如・真如」を概観したが、宗派や依拠する經典によつて様々である。

智顛は、如は如是の如をいう。如是相・如是性・如是体・如是力・如是作・如是因・如是縁・如是果・如是報・如是本末究竟等の十種の如のそれぞれが真実のすがたであり、同一の実相であることをいう。

如・真如は、一切の事象の真実で永遠不変なる本性、万有の真実相をいい、あるいは平等にして無差別なる普遍的真理をいうのが、大乘の立場であるとされるが、上の諸説に見るように、如・真如に固定的不変な独自の実体があるとする、本体論に立脚する如・真如が多い。もし如・真如に、固定的不変な独自の実体があるとするならば、釈尊の教説が立脚する「縁起の理法」に反することになる。つまり、如・真如に本体があるとすれば、一切は無常であるとする理に反する。無常に反するから無我に反する。無

我に反するから空に反する。空に反するから衆縁和合であるとする「縁起の理法」に反する。縁起の理法に反する教説は、釈尊の教説ではなく、非仏教の教説であるといわざるを得ない。

縁起の理法は、因と縁とが相乗し複合し、和合して、本来非連続の因(縁)と果(報)とが生起することであり、果(報)が因(縁)となつて、新しい果(報)を造り続けることである。非連続が、生・住・異・滅の刹那滅として連続するのが縁起の理法である。

釈尊が説く縁起の理法が如・真如とされるのは、固定的不変な独自の実体としての如・真如ではなく、非連続の連続、あるいは連続の非連続として、非連続と連続が共にあることに理法の生命が存在する。つまり、衆縁の和合・縁生というはたらき、衆縁の刹那滅・縁滅というはたらきは現象するが、固定的不変な独自の実体、永遠不変の本体はないとするのが如・真如の意味の根本である。

如・真如をこれに反して、はたらきとしてあるのではなく、真実にして永遠不変の本体であると取るならば、所謂本覚思想に墮することになる。

本覚としての如・真如、本体としての如・真如の誤解を避けるため、非連続と連続が共存する衆縁和合の如・真如を、「真実」の語をもって表記する。

従つて、関口真大訳注『天台小止観』(『岩波文庫本』一

『天台小止観』の研究(七)(大野)

五八頁)の「如一如如、真如などという。あらゆるものごとの根源的な実体で、真実にして変転しない本性」という注(12)は採ることができない。

(42) みなこれ幻化なり〓「幻化」は、一般的に、幻のように現われるものをいう。

「幻」は、まぼろしをいう。一切の事象には実体性がなく、ただ幻のように仮にすがたを現出しているに過ぎないことをいう。

「化」は、改変して他のものとなることをいう。特に仏・菩薩が衆生教化のために神通力によつて、種々のすがたを現わすことをいう。だから、幻化は、幻のように改変して現われることをいうから、人の幻覚によつて造り出された実体のないものの意と取る。

従つて一句は、魔羅鬼がすがたを変えて現出するのは、すべて幻覚となつて現われたものであるの意をいう。

(43) 愚人は了せず〓「愚人」は、一般的には愚かな人をいう。「愚」は、愚癡と同義。真実に対する無知、すなわち心が暗くて一切の道理に通じる智慧に欠けたありさまや、それが誤つた行ないの原因となることをいう。すなわち大乘が説く人法二空・人法二無我の理に無知なこと、一切は縁起によつて起こるから一切に実体がないとする理に無知なこと、色心等の不可得空に無知なことをいう。だから愚人は、ここでは、自我を捨てることができず、自我に塗れて生き

『天台小止観』の研究(七)(大野)

ている愚かな人をいうと取る。

従つて一句は、自我を捨てきれない愚かな人はの意をいう。

(44) 患を致す「患」は、患悩の患をいう。患は身体的な病をいい、悩は心の苦をいう。病はこの兩者をいう。

従つて一句は、遂には身体的な病まで引き起こすことになるの意をいう。

(45) みなこれ行人が無智にして患を致すなり「みな」は、これまで説き明かした魔羅鬼のしわざの意と取る。

「無智」は、智慧が欠けることをいう。智慧が欠ける人を愚人・愚者という。無智は、一切は、縁起によつて起こるから実体がないという道理に無知なことをいう。ここでは、魔羅鬼のしわざは実体がない幻覚に過ぎないと見極める、正しい智慧が修行者にならないの意と取る。

従つて一句は、これまで説き明かした魔羅鬼のしわざが、修行者に、魔羅鬼のしわざは実体がない幻覚に過ぎないと見極める、正しい智慧がないから、身体的な病まで引き起こすの意をいう。

(46) もし諸の魔境が悩乱して「魔境」は、字義では、魔羅鬼の境地をいう。魔界と同義。ここでは境は、眼・耳・鼻・舌・身・意の六識の対象である、色・声・香・味・触・法の六境をいう。人の心は本来これを取り、あれを捨てるという固定的なはたらきはない。固定的なはたらきのない

心に、日常の生活の中でこれを取りあれを捨て、やがて摺一の固定的な心を造り上げてしまふ。固定的な価値観に束縛された心を色眼鏡にして、対象を分別するのが自我意識である。摺一してやむところがない自我に塗れた境地、すなわち自我によつて造り出される対象世界を、象徴的比喩的に魔羅鬼の世界としたのが魔境・魔界の意である。

つまり、対象に常に惑い迷い、迷うために人生を生きている有り様が、魔境・魔界・魔事境である。

「悩乱」は、心が悩み心配し、混乱することをいう。従つて一句は、いろいろな魔羅鬼のしわざによる心の混乱の意をいう。

(47) 端心正念にして堅固なるべし「端心正念」は、心を正しく保つこと、心のおもいを正しくすることをいう。

「堅固」は、一般にしっかりしていること、かたいことをいう。ここでは、意志が堅いことをいう。

従つて一句は、心のおもいを正しく保つて、意志を揺るぎないものにならなければならないの意をいう。

(48) 憂懼を懐くことなれ「憂懼」は、憂いたり心配したりするの意をいう。

従つて一句は、憂いたり心配したりしないようにしなければならぬの意をいう。

(49) まさに大乘方等の諸の治魔の呪を誦し「大乘方等」は、一般的には、大乘方等経典をいう。『維摩経』『勝鬘経』

などの大乘經典の総称である。方等とは、普遍平等なる実相の理をいい、これを説いた大乘の經典を大乘方等經典とする。ここでは、大乘は方等と同義（『法華玄義』卷第十下（『大正藏』三三・八一〇a）。方等は、いわゆる「五時八教」の第三方等時の方等と取る。第四般若時と第五法華涅槃時に配当される經典を除いて、小乗から大乘への道筋を付ける大乘の諸經典をいう。

「治魔の呪」は、魔羅鬼を対治する呪文をいう。

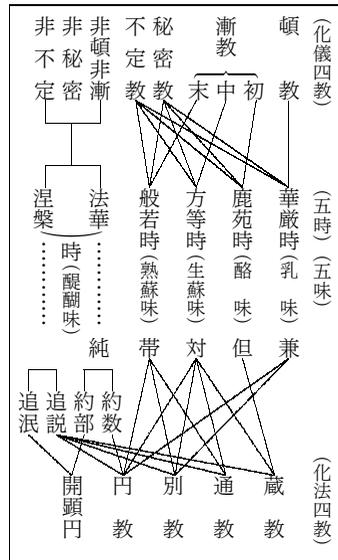
「大乘方等の諸の治魔の呪」は、第四般若時と、第五法華涅槃時に配当された經典を除く、大乘の諸經典で説かれる魔羅鬼を対治する呪文をいうが、ここでは、『方等陀羅尼經』が説く十八種の摩訶持陀羅尼等をいうと取る。

従って一句は、『方等陀羅尼經』が説く、十八種の摩訶持陀羅尼を始めとして、大乘經典に説き示されている魔羅鬼を対治する呪文を唱えたりの意をいう。

「五時八教」は、隋の智顛が説いた天台の教判である。仏教の諸經典の内容を分類し解釈して、

- (1) 仏陀の説法の順序から華嚴・鹿苑・方等・般若・法華涅槃の五時に分けた。
- (2) 衆生を教え導く形式方法から頓・漸・秘密・不定の四種類の化儀の四教に分けた。
- (3) 衆生の性質や能力に応じて教え導いた教理内容から、藏・通・別・円の四種類の化法の四教に分けた。これ

『天台小止観』の研究（七）（大野）



らを総称して、五時八教という。

第三方等時は、第二鹿苑時の後八年間に、『維摩經』『思益經』『楞伽經』『勝鬘經』などの方等經を説いた時期をいう。説いた教法は、藏・通・別・円の四教を並説し、第二鹿苑時で得た小乗の浅い悟りを仏の深い悟りと同一視している偏見を打破した。

その中では折小數大（小乗は詰まらないと非難し、大乘はよいと褒め称える）・彈偏褒円（偏教をけなし、円教を褒める）の意味が説かれ、恥小慕大（詰まらない小乗を恥じて、尊い大乘を慕う）の思いを起こさせる。仏の教化の意味からすれば彈訶（小乗は詰まらないと叱り付ける）の時とし、日の光でいえば今の八時頃（食時）に例えられ、

『天台小止観』の研究(七)(大野)

牛乳でいえば、酪の次の段階である生蘇味しょうそに喩えられる。方等というのは、大乘経の通名であるから、大乘の初めであり、小乗から大乘への道筋を付ける意を込めて、方等時と名づけた。

智顛は、罪業の懺悔法を、『方等三昧行法』『方等懺法』『方等三昧』で講説している。この三本の根拠となった經典は、北涼の法衆が翻訳した『方等陀羅尼經』四巻である。『方等陀羅尼經』は、人が造った業・カルマを懺悔するための、懺悔法を説き明かした經典である。

その初分第一(初分余第二)の冒頭に、「摩訶袒持陀羅尼等の十八種の陀羅尼法門を説いた」とある。懺悔法について、「すなわち七日間を一期とし、日に三度体を洗い、浄潔衣を着て、仏の形像に座して、五色の幡蓋を懸ける。そこで陀羅尼の章句を百二十遍誦しながら、百二十匝を遶る。章句を誦し遶り終わったら坐して思惟する。思惟し終わったら章句を誦し遶る。これを七日間繰り返す」と、半行半坐三昧(方等三昧・法華三昧)を説いている。そして、「要らず月の八日と十五日は、師に対しておのれの犯した罪を告白せよ」と懺悔を規定し、またもし一々の諸戒を犯すことがあれば、一心に懺悔しなければならぬとする。更に護戒分第四には、「四重梵戒を毀した比丘は、至心にこの摩訶袒持陀羅尼を憶念して、一千四百遍を誦して、一比丘に請うて証人となつてもらい、自らその罪を形像に向

かつて陳べる。これを八十七日間繰り返して懺悔しなければならぬ。八重梵戒を毀した比丘尼は、まず内外の律に通達した比丘を請うて、その罪咎を彼の比丘に向かつて陳べる。これを九十七日間繰り返し、日に四十九遍の陀羅尼を誦す。八重梵戒を毀した菩薩は、六十七日間にわたつて陀羅尼を六百遍誦して一懺悔とする懺悔法を修す。また仏は一切衆生を慈愍するから、この陀羅尼を説くとし、もし下劣の沙弥・沙弥尼・優婆塞・優婆夷があれば、四十七日間にわたり四百遍の陀羅尼を誦して一懺悔を修する」と規定している。

このように、『方等陀羅尼經』は、摩訶袒持陀羅尼の因縁・功德・修懺の方法を詳細に説き明かしている。すなわち、摩訶袒持陀羅尼の功德は広大深遠で、この章句を唱えれば、その功德によって、あらゆる魔障悪業から解放され、善根を増長させることができる。摩訶袒持陀羅尼の功德の面からだけ『方等陀羅尼經』をみれば、現世利益の信仰を説くようであるが、経は、あくまで自己を内観していく過程で、魔障罪業はおのれの心の中にあることを、大乘の空の原理を根底にして、一人ひとりに教示しようとするものである。つまり、人はこの現実において、六道の苦界の真つ只中に生きている。人は生きることそのことが破戒行為に繋がる生き方をしていく。その人に残された唯一つの道が懺悔法である。人は懺悔によって生きる以外に

生きる生き方はない。現実の罪業に塗れた自己を、誤魔化すことなく、どこまでも直視して内観していくことを問うところに、『方等陀羅尼經』の真意がある。

なお、『方等陀羅尼經』に基づいて、智顛が兄の陳鍼などのために初歩的な懺悔法を説いたのが「方等懺法」である。これが、中国の僧俗の間に盛んに実修された。その後、『方等陀羅尼經』をもとに、罪業の懺悔法を体系化したのが『方等三昧行法』である。

(50) 三宝を存念すべし 〓 三宝は、仏の悟りを開いた人と、その教えと、それを奉じる教団の三つをいう。

「存念」は、片時も忘れず、いつも思い続けていることをいう。

従って一句は、仏・法・僧の三宝を片時も忘れず思い続けていなければならないの意をいう。

(51) みずから防ぎ 〓 坐禅に入る時、修行者は、呼吸を一から十まで数えて、鼻と口の前に置いた心に意識を集中し、やがて呼吸に心を従わせる。心をこのように調整することができれば、心は自然に臍下三寸の丹田に落ち着く。心が丹田に落ち着いたところで、心のはたらきを一つの対象に専注して停止する「止」を行じ、おのれの心を観察し物事の実相を観察する智慧を引き出す「観」を行じていく。

坐禅に入る時でも、数息と随息に十分は要する。坐禅を出る時は、入る時以上に用心が必要である。これを怠ると、

『天台小止観』の研究(七)(大野)

精神に異常を来すことがある。禅定を出る時は、緊張していた修行者の気持ちが一気に弛む。気持ちが弛む時、心に隙間ができる。心に隙間ができると、その隙間にあれやこれや思い巡らし分別する雑念が起る。折角、坐禅による禅定によって、止と観を修行実践し、本来の心を得得し、一切の汚れを離脱した清浄な境地にあるのに、自我によって起る雑念が心の隙間から心に忍び込んでしまうことになる。これを象徴的比喩的にいつたのが、魔羅鬼に魅入られるということである。

一句は、魔羅鬼に魅入られ、心の隙間に雑念が入るのを防ぐことをいう。

(52) 懺悔慚愧し 〓 「懺悔」は、自分が造った罪業を師に告白することをいう。

「慚愧」は、罪を恥じることをいう。

従って一句は、自分が造った罪業を師に告白し、罪を恥じるの意をいう。

「懺悔」の懺は、ゆるしを請うこと、悔はくやむことをいう。従って懺悔は、人に罪のゆるしを請うこと、犯した罪を仏の前に告白すること、悔い改めることをいう。原始仏教では、比丘は自分の犯した罪を釈尊または長老比丘に告白して、裁きを受けることになっていた。比丘は半月ごとに集まってウポサタ・布薩という儀式を行なう。戒律の箇条が読み上げられるにつれて、罪があるときは自分で申

『天台小止観』の研究(七)(大野)

し出たのである。その際、他の比丘の罪をあげ、謹^{けんじん}責^{せき}する比丘は、(1)時に応じて語る、(2)真実をもつて語る、(3)柔軟に語る、(4)利益のために語る、(5)慈心をもつて語るという注意を守らなければならなかった。

大乘では、自己の罪を認めた者は、諸仏の前に懺悔し、帰投し、摂受されて、罪の恐れから解放されるといふ形のものとなった。

「慚愧」は、罪を恥じることをいう。慚と愧にいろいろな解釈がある。

(1)慚は、自ら罪をつくらないこと。愧は、他に教えて罪をつくらせないようにすること。

(2)慚は、心に自らの罪を恥じること。愧は、自らの罪を人に告白して恥じ、罪のゆるしを請うこと。

(3)慚は、人に対して恥じること。愧は、天に対して恥じること。

(4)慚は、他人の徳を敬うこと。愧は、自らの罪に対する恐れ。

(5)慚は、自らを觀察することによって自らの過失を恥じること。愧は、他人を觀察することによって自らの過失を恥じること。

(53) 波羅提木叉戒を誦すべし。波羅提木叉戒一は、教団において守るべき戒律をいう。波羅提木叉戒は、大乘においては『梵網経』に説く梵網戒 すなわち、十重梵戒と四

十八輕戒をいう。また、『梵網経』に説く十重禁戒と四十八輕戒と、『善戒経』に説く三聚淨戒などを大乘戒とも、菩薩戒ともいう。

従つて一句は、教団において守るべき十重禁戒や四十八輕戒や三聚淨戒などの条文を唱えなければならぬの意をいう。

『梵網経』に説く十重禁戒と四十八輕戒と、『善戒経』に説く三聚淨戒などを大乘戒とも、菩薩戒ともいい、また天台では円頓戒、真言では三昧耶戒、禪では無相心地戒という。

十重禁戒は、不殺戒・不盜戒・不姪戒・不妄語戒・不酤酒戒・不説過罪戒・不自讚毀他戒・不慳戒・不瞋戒・不謗三宝戒をいう。

四十八輕戒は、不敬師長戒・飲酒戒・食肉戒・食五辛戒・不學教懺戒・住不請法戒・不能遊學戒・背正向邪戒・不瞻病苦戒・畜殺生具戒・通國使命戒・惱他販賣戒・無根謗毀戒・放火損生戒・法化違宗戒・貪財借宝戒・依勢惡求戒・虚偽作師戒・鬪諍両頭戒・不救存亡戒・不忍違犯戒・慢人輕法戒・輕蔑新學戒・怖勝順劣戒・為主失儀戒・領寶違式戒・受他別請戒・自別請僧戒・邪命養身戒・詐親害生戒・不救尊厄戒・橫取他財戒・虚作無義戒・退菩提心戒・不発願戒・不生自要戒・故入難處戒・坐無次第戒・不行利樂戒・摂化漏失戒・惡求弟子戒・非如說戒戒・故違聖禁戒・不重

輕律戒・不化有情戒・說法乖儀戒・非法立制戒・自破內法戒をいう。

三聚淨戒は、

(1) 撰律儀戒は、一切の諸惡をみな断じ捨て去り、仏の制した戒めを守つて惡を防止する防非止惡の戒である。十重禁戒と四十八輕戒をはじめ、一切の過惡を離れる戒を字受持すること。

(2) 撰善法戒は、積極的に一切の諸善を實行すること。

(3) 撰衆生戒は、一切の衆生をみな悉とく撰取して、救済利益することをいう。

なお、撰律儀戒は小乘も説くが、撰善法戒と撰衆生戒は、大乘特有の戒である。撰律儀戒と撰善法戒は自利行であり、撰衆生戒は利他行をいう。

(54) 善知識に親近すべし二善知識一は、一般的には、佛陀の教えを繼承してんば傳播する、高い徳行を具えた人物、正しい道に導く指導者をいう。ここでは、『天台小止観』第一章「縁を具えよ」第五に、「善知識に近づくと、善知識に三種あり。一には、外護の善知識なり。供養を經營し、よく行人を將護し、あい悩亂せず。二には、同行の善知識なり。ともに一道を修し、たがいにあい勸発しあい擾亂せず。三には、教授の善知識なり。内外の方便・禪定の法門をもつて示教し利喜す」と示されている。(1)外護の善知識、(2)同行の善知識、(3)教授の善知識という、三条件を具えた

『天台小止観』の研究(七)(大野)

人をいう。

「親近」は、親しみ近づくことをいう。

従つて一句は、外護・同行・教授という三つの条件を具えた善知識に親しみ近づく必要があるの意をいう。

インドの修行にヨーガがある。『ヨーガ・ストトラ』では、プルシャを最高神とする。世界の苦の原因は、無明に由来する、見るものであるプルシャ・神我と、見られるものであるプラクリティ・自性との結合にあるとする。無明が明智によつて解消されたとき、プルシャが物質的束縛から解放されて独存となり、これが解脱としての完全性の状態であるとす。この明智を得るための実践手段がヨーガである。

ヨーガの行者ヨーギンは、調息などの方法によつて心を一点に集中し、止と観とを主とするヨーガを實踐し、有想三昧から無想三昧に入り、解脱を達成しようとする。

ヨーギンは一人の行であるが、仏教の出家者が遊行するときは、ブツダが常時アーナンダを従えていたように、二人以上で組む。同じような修行段階にある二人ではなく、一人は高い修行段階にある年配の出家者と組む。それは、増長慢、一人よがりにならないためであり、挫けそうになると励まし合い、互いに切磋琢磨し合うためである。この同行がサンガ・僧伽の原点であり、教団の基本である。

サンガには比丘カンガと比丘尼サンガのほかに、現前サ

『天台小止観』の研究(七)(大野)

ンガと四方サンガがある。現前サンガは、現実に存在する実体的サンガをいい、ある土地に最低四人以上の比丘(比丘尼)が集合して定められた修行生活を送るときに成立する。四方サンガは、時間的空間的に限定されない、理念としての全教団をいう。

(55) かくのごとき等の難事あるがための故なりⅡ「かくのごとき等の」は、続いて次に説くことをいうと取る。

「難事」は、一般的には、難しいこと、困難なことをいう。ここでは、比喩的象徴的に魔羅鬼のしわざとされる、対象にとらわれ、とらわれたものに執著し、執著したものに妄執する、自我・自我意識に呪縛された人の生き方をいう。

従って一句は、次に説くように、魔羅鬼のしわざに惑わされて正しい道を外れるという、初心の修行者では乗り越えることが難しいことがあるの意をいう。

(56) この魔が人心に入るとき、よく人をして心神を狂乱せしめ、あるいは憂いあるいは喜び、これに因つて患をなし、乃至、死を致すⅡ「人心」は、隙間があつて魔羅鬼、すなわちいろいろな雑念が入り込む余地のある人の心、いまここに持ち合わせている煩惱に塗れた心、対象にとらわれ散乱する人の一念をいう。

「心神」は、人が本来具えている清らかな心、自性清浄心、「一心・仏・衆生三無差別」の心である人の一心をいう。

なお、神はゴッドを意味しない。衆生の心は靈妙であるから、神の字が付け加えられている。

「あるいは憂いあるいは喜び」は、昏沈と掉挙、すなわち鬱と躁、憂鬱と興奮を繰り返すことをいう。

「患」は、患悩の患をいう。患は身体的な病をいい、悩は心の苦をいう。病はこの両者をいう。

従って一句は、心の幻覚に過ぎない魔羅鬼が人の心に入り込むと、修行者の心は狂つてしまふ。心を暗く沈ませたり、心を騒がしく動かせたりする。この憂鬱や興奮が原因となつて身体的な病を引き起し、果ては死に至らせてしまふの意をいう。

(57) 後にすなわち大いに人の出世の善事を壊しⅡ「出世」は、出世間をいい、出家者をいう。

「善事」は、人の救済という利他行をいう。

「人の出世の善事」は、自分を捨てて他を救うという、出家者の生命である利他の行をいう。

「人の出世の善事を壊し」は、自分を捨てて他を救うことを目的とするのが、出家者の絶対条件である。自分を捨てて他を救うことができなければ、出家者の存在意義がない。死んでも同然である。自分を捨てて他を救うことができなければ、出家者としての死命を制せられたも同然である。一句は、これをいう。

従って一句は、後になつて、魔羅鬼が変身して得た教え

は、出家の修行者の生命である、己れを捨てて人々を救済しようとする善事を打ち壊してしまうの意をいう。

(58) 諸異Ⅱ「諸異」の異は異相と同義。諸異は、前出の「魔事は衆多なり」を受ける。従って、魔羅鬼のすがたはいろいろであることをいう。

(59) 妄りにⅡ「妄りに」は、無造作にの意。人の自我を比喩した魔羅鬼は、人の心が弛んだ隙に、人の心に入り込んでくる。人が目で対象を見ると、見た対象にとらわれ執著する。そこに、心の隙ができる。人が耳で音を聞くと、音にとらわれ執著する。そこに、心の隙ができる。

こうして、眼・耳・鼻・舌・身・意の六つの感覚器官が、色・声・香・味・触・法という六つの対象にはたらいで、眼・耳・鼻・舌・身の五識が感受し、意識という分別識が認識することによって、心に隙間ができる。心に隙間ができると、そこに魔羅鬼が入り込む。自我意識、すなわち魔羅鬼が入り込む隙間ができると、修行者の心は、無造作に魔羅鬼の世界に迷い込み取り込まれてしまうことをいう。

(60) 邪を遣つて正に帰せんと欲せばⅡ「邪を遣つて」の邪は、魔羅鬼に惑わされた邪心をいい、遣つては、取り除くことをいう。従つて邪を遣つては、魔羅鬼に惑わされた邪心を取り除くことをいう。

「正に帰せんと」の正は、仏の教えに基づく正道をいい、帰せんとは、帰着と同義であり、正道に帰り着くこと、正

『天台小止観』の研究(七)(大野)

道に落ち着くことをいう。

従つて正に帰せんとは、仏の教えに基づく正道に戻り落ち着くことをいう。

人生は、敷設ふせつされた見えないレールの道の上を進むようなものである。だから、魔羅鬼に付け入る隙を与えなければ、人としての本来の道を踏み外すことがない。踏み外したとしても、魔羅鬼に付け入る隙を与えなければ、本来の自己を取り戻し、正道に戻つて歩くことになることを一句はいう。

従つて一句は、魔羅鬼に惑わされた邪心を取り除き、本来の自己を取り戻して、仏の教えに基づく正道に落ち着きたいと願うならばの意をいう。

(61) 諸法実相を観ずべしⅡ「諸法実相」は、一般的には、現象としてのあらゆる存在は、そのまま真実在のあらわれであること、存在するものすべてが真実のすがたであるということ、存在するものすべてが真実のすがたであることと取る。すべてが完全に調和した真実の世界にあることと取る。

「観」は、「実観」と同義。実観は、諸法実相の真実を観みこと、すなわち、諸法実相の真実そのものを実観することの意と取る。

従つて一句は、存在するものすべてがありのままにあり、すべてが完全に調和した世界にあるという、諸法実相の真実そのものを実観しなければならないの意をいう。

『天台小止観』の研究（七）（大野）

「諸法実相」は、『法華経』の方便品に説かれ、大乘では、諸法実相が一法印・一実相印とされる。諸法実相は、一切のものの真実のすがた、すべてのものの、ありのままなる在り方をいう。

智顗は、『法華経』の方便品に説かれた諸法実相の四文字を明らかにするために、『法華経』の全二十八品から、諸法実相を追究し、膨大な天台教学を打ち立て、『法華正義』や『摩訶止観』に結実させた。

眼が対象を見れば、自動的に心がはたらき、これかあれかの二者を択一する分別識がはたらく。人がものを見、目の分別で区別し、比較し、喜怒哀楽の虜になり、曇った目を更に曇らせて見る。人は眼・耳・鼻・舌・身・意の六根を、色・声・香・味・触・法の六境にはたらかせ、眼・耳・鼻・舌・身・身の五識が感受し、意識という頭の分別識で認識する。対象を分別する分別識は、おのれのわがままに振り回される自我のはたらきであり、おのれが色を付けた色眼鏡を通して見るのであるから、すべてのものがあるのままにあり、すべてが完全に調和した世界にあるという諸法実相の平等の世界を観ることはできないはずがない。

諸法実相を観るには、対象に執著しない、丹田に置かれた心という無分別識で観る以外、観る方法がない。諸法実相が立つには、丹田に置いた一心という無分別識によって真実を観る実観によるしかない。

こうして智顗は、浄心である一心と、妄心である一念に行き着き、一心と一念を徹底して追究していった。一心と一念を追究していった智顗は、『摩訶止観』で、われわれ凡夫が日常起こしつつある一瞬一瞬のかすかな心に、三千の数で現わされる宇宙の一切のすがたが完全に具わっているとす、**「一念三千」**の思想に至り着くことになる。

「一念三千」の思想は、究極には、一念という極小の世界と、三千という極大の世界が、相即相入して渾然一体となつてゐることをいう。

人は、極小のかすかな一念の中に、三千の差別相という極大の世界を造る。だから人が、人としての正道を歩くためには、どうしてもこの三千の差別相と対峙しなければならぬ。対峙して心に隙間を造らないようにしなければ、人が歩く正道を妨げる自我、比喩的には魔羅鬼が、眼・耳・鼻・舌・身・意の六つの感覚器官が造る、三千の隙間から自在に出入りする。

一念が造つた三千の差別相が次の一念に受け継がれ、受け継がれた三千の差別相が次の一念に受け継がれていく。こうして念念相続し、堅固な業・カルマとなる。業・カルマとなった三千の差別相が、堅固な無尽蔵の自我を造り上げていく。

人は、自我の眼で対象を厳しく分別し、分別した対象にこだわりの、こだわった対象に執著し、執著した対象に妄執

し、妄執に束縛されていく。自分の業・カルマによって自我を造り、造った自我の網に自縄自縛され、自縄自縛された自我を積み重ねるのが、三千を数える差別相である。

すべての現象的存在に差別はない。すべての現象的存在に別け隔てはない。すべては平等一味であると、当たり前のものを当たり前に観るのが仏教の基本である。

仏教は、自分を変えていくことに役立つ教えであり、決して人間を超越した存在になるための教えではないというのが、基本姿勢である。

葦の葉の上に一滴の露が宿っている。そこに朝日が輝いてキラッと映る。この一滴の雫の中に全宇宙が映し出される。春が来れば花が咲き、秋になれば木の葉が紅葉する。

この自然なありようが法のすがたであり、諸法実相の真実である。人の顔は、目は横につき、鼻は縦についている「眼横鼻直」が諸法実相の真実である。から手で故郷へ帰る「空手還郷」は、何ものにもとられず、何ものをも求めない「本来無一物」である。

現象的存在の一切が如法にあること、これが諸法実相である。

(62) 『大智度論』巻第五の引用。「また次に、諸法実相を除いて、余の残りの一切法を尽とく名づけて魔となす」(『大正蔵』二五・九九b)とある。

『天台小止観』の研究(七)(大野)

一句は、諸法実相以外の心はすべて魔である。魔でないものは諸法実相だけであることをいう。

(63) もし分別憶想すれば すなわちこれ魔羅の網なり 動ぜず分別せざるを これすなわち法印なりとす』『大智度論』巻第二十の引用。「もし分別憶想すればすなわちこれ魔羅の網なり 動ぜず依止せざるを これすなわち法印なりとす」(『大正蔵』二五・二一a)とある。

「魔羅の網」は、魔羅鬼が張り巡らす網をいう。魔羅鬼は、人が自分で造る自我を比喩的にいったものであるから、魔羅の網は、自分が仕掛けた網の中に自分が捕らわれてしまふことをいう。

「動ぜず分別せざるを」は、字義からは、対象に心を掻き乱されることがなく、あれとこれを分別し二者択一することがないことをいう。ここでは苦の原因となる、自分の思い通りにすること、自分の思い通りにできると思い込み、自分の都合でわがまま勝手なことをしないと取る。

仏教は、人の生き方を楽な生き方に変えよと教える。自分の勝手から、他を思い通りにしようとして振り回し、自分勝手なわがままをいうことを絶対に入れてはならないとするところに、仏の教えの真意がある。一句はこれをいう。

「法印」は、ここでは「諸法実相」の法印と取る。従って一句は、人は、心であれこれ思うことによって、

『天台小止観』の研究（七）（大野）

自我を生じる。自分が造った自我という魔羅鬼が張り巡らした網によって、自分が搦め取られて身動きができなくなってしまう。だから、心であれこれ思うことを捨てれば、対象に心を掻き乱されることがない。塗れた自我に動かされて、あれとこれとを分別し二者択一するわがままをいわなければ、魔羅鬼の網に捕らわれることはない。仏が説く人の正しい道を歩もうとするとき、一番恐いのが魔羅鬼、すなわち自我だと説くのが、仏教の旗印「諸法実相」であるの意をいう。

「法印」の法は仏法・仏教、印は旗印の意。法印は、仏教の旗印・標幟、特質をいい、仏教であることを証明する思想の規準をいう。

『雜阿含經』卷第十には、一切行無常（すべての造られたものは移り変わる。諸行無常）、一切法無我（すべてのものには我体、実体はない。諸法無我）、涅槃寂靜（涅槃の悟りはすべての矛盾を超越した静けさである）の三を説く。後世、これが三法印と呼ばれた。これに「一切皆苦」を加えて四法印という。

『法華玄義』卷第八上は、三法印は小乗の法印であり、大乘にはただ「諸法実相印」（すべてがそのまま真実である）という一法印のみであるとす。これが『法華經』による立場である。

従って、一実相印の諸法実相を加えて、四法印とする立

場もある。

〔現代語訳〕

第八 覚知魔事

—— 心中に居住する魔の障りを知り、離れなさい ——

サンスクリット語でいう「魔羅」は、中国では生命を断つものの意から、「殺者」と呼ばれた。

このように呼ばれるのは、魔は、仏道修行に励む者が善を積み、修行を実践した結果得られる功德という財産を奪い去り、煩惱を断つて自他救済を可能にする智慧という生命を奪ってしまうからである。

どのようなことが、仏道を妨げる魔の仕業というのか。仏は、善を積んで得られた功德や、煩惱を断つて自他救済を可能にする真実の智慧の力で、生きとし生ける衆生の自我を取り除き、苦しみから解放することを、なすべき勤めとしている。

魔は、仏のはたらきとは逆に、生きとし生ける衆生が善を生じようとする正しい行為を押し止め、生死という迷い

の苦海に、生まれ変わり死に変わらせることを、なすべき勤めとしている。

菩薩道にある修行者が、止と観の修行実践の中に身を置いているとき、いくら六波羅蜜を實踐して自我を克服し、広い心をもとうと修行を重ね、境界が高くなっても、他を利益する「捨」に徹することがなければ、魔のはたらきが旺盛となつて修行者に付き従い、悟つたのか、魔を心に入れたのかが分からなくなってしまう。

このような理由から、仏道の妨げとなる魔の仕業を、徹底して見極め見定めなければならぬ。

さて、魔に四種類の区別がある。

その一は、身心を悩ます貪りや、怒りや、愚かさや、慢りなどの煩惱を魔とみた、「煩惱魔」である。

その二は、身体および身体を構成する諸要素を、種々の苦しみを生じる魔とみた、「陰人界魔」である。

その三は、死を魔とみた「死魔」である。

その四は、生死を超えようとする者を妨げる鬼神を魔とみた、「鬼神魔」である。

最初の三種類の魔は、仏教の世界ではよく知られた魔で

『天台小止観』の研究(七)(大野)

ある。従つて、この第八章「覚知魔事」では、ことわけを開き示すことはしない。

その四の鬼神魔のすがたとしては、鬼神魔に悩まされ乱される有り様を熟知しなければならない。ここで鬼神魔について簡略に説き明かすことにしたい。

鬼神魔には、普通三種類が挙げられる。

その一は、獣の精が、種々に変化して、修行を妨げる「精彪鬼」である。

その二は、身体の感覚器官に感触を起こして、修行を妨げる「堆惕鬼」である。

その三は、人を悪に誘い、生命を奪い、善事を妨げる

「魔羅鬼」である。

その一は、「精彪鬼」である。

精彪という鬼は、午前零時の子の刻の鼠、午前二時の丑の刻に始まり、午後十時の亥の刻の猪に終わる。十二時の獣が、種々に形を変え、すがたを現わす鬼神魔である。

時には、少年のすがたや、少女のすがたや、老人のすがたを取り、時には、恐ろしい形相を取ったりする。すがたの形は千差万別で、一定のすがた形に決まてはいない。十

二時の獸が、このようなすがた形に変化して現われ、修行者の人の心を悩ませ迷わせる。

この十二時の獸が変化して現われる「精彪鬼」が、修行者を悩ませるときは、それぞれの獸が配当されている、決まった時刻に現われるものである。「精彪鬼」が現われるのは、このようであるから、十分に見極め見定めなくてはならない。

例えば午前四時の寅の刻に現われる精の多くは、虎や豹などの「精彪鬼」である。

例えば午前六時の卯の刻に現われる精の多くは、兎やくじかや鹿などの「精彪鬼」である。

例えば午前八時の辰の刻に現われる精の多くは、龍やわなどの「精彪鬼」である。

例えば午前十時の巳の刻に現われる精の多くは、蛇やおろちなどの「精彪鬼」である。

例えば午後零時の午の刻に現われる精の多くは、馬や驢馬や駝などの「精彪鬼」である。

例えば午後二時の未の刻に現われる精の多くは、羊などの「精彪鬼」である。

例えば午後四時の申の刻に現われる精の多くは、猿や大猿などの「精彪鬼」である。

例えば午後六時の酉の刻に現われる精の多くは、鶏や鳥などの「精彪鬼」である。

例えば午後八時の戌の刻に現われる精の多くは、狗や狼などの「精彪鬼」である。

例えば午後十時の亥の刻に現われる精の多くは、猪や豕などの「精彪鬼」である。

例えば午前零時の子の刻に現われる精の多くは、鼠などの「精彪鬼」である。

例えば午前二時の丑の刻に現われる精の多くは、牛や犢などの「精彪鬼」である。

修行者は、出てきた幻覚を自分の頭で観察し判断する。そして、同じ獸の幻覚がいつも同じ時刻に現われるならば、幻覚による妄想はその時刻の獸の「精彪鬼」によって引き起こされたことが分かる。

このように分かったら、その獸の名称を呼んで、責め叱り付けなさい。そうすれば、その精彪鬼は姿を消していくものである。

その二は、「堆惕鬼」である。

堆惕という鬼は、身体感覚器官に感触を起こして修行者を悩ませ乱す鬼神魔である。ときには、堆惕鬼が虫や蠅のように、修行者の顔面にまとわりついて毒針を突き刺して、シカッと痛みを感じさせたり痺れさせたりする。またときには、堆惕鬼が修行者の両方の腋の下を叩いて激しい痛みを走らせたり、ときには、修行者を不意に抱き抱えて金縛りにする。またときには、堆惕鬼が喧しく騒々しく話しかけたりする。また、堆惕鬼が種々の獣のすがた形を借りて現われることがあるが、すがた形は獣のすがた形ばかりでなく千差万別、決して一つではない。

このように、堆惕鬼が種々の獣のすがた形を借りて現われて修行者を悩ますときは、それが堆惕鬼だと気づいたら、心を統一して集中し、眼を閉じて心の中でこっそりと堆惕鬼を罵り、次のように言えばよい。

「私はいま、お前の正体が分かった。お前は、この世で火を喰い、香を嗅ぎ、修行者の法臘を盗み取る悪鬼の吉支だ。お前は、因果の道理を知らない。お前は、修行者が戒律を破ることを喜ぶ輩だ。私はいま、戒律を守り犯していない。

『天台小止観』の研究(七)(大野)

だから、お前を恐れお前の言いなりにはならない」と。

堆惕鬼と対峙する人が出家者ならば、先ず菩薩戒である殺戒・盜戒・姪戒・妄語戒・酤酒戒・説四衆過戒・自讚毀他戒・慳惜加毀戒・瞋心不受悔戒・謗三宝戒の十重梵戒を唱え、次に不敬師友戒・飲酒戒・食肉戒などの四十八輕戒を唱えなさい。

堆惕鬼と対峙する人が世俗にある在家の人ならば、先ず帰依仏・帰依法・帰依僧の三帰文を唱え、次に不殺生戒・不偷盜戒・不邪姪戒・不妄語戒・不飲酒戒の五戒を唱え、続いて不殺生戒・不偷盜戒・不邪姪戒・不妄語戒・不飲酒戒・離眠坐高広嚴麗牀座戒、離塗飾香鬘離舞歌觀聽戒・離非時食戒の八戒などを唱えなさい。そうすれば、堆惕鬼は腹ばいになって後ずさりして消えていく。

このように、種々の堆惕鬼が入ってきて修行者の善事を押し止め、修行を妨げ、修行者を悩ます有り様や、その他種々の堆惕鬼を除く方法は、『治禪病秘要法』に詳しく説き明かしている。

その三は、「魔羅鬼」である。

魔羅という鬼も、修行者の心を乱し悩まし、悪に誘って

善心を妨げ、生命を奪う鬼神魔である。

魔羅鬼は多くの場合、修行者に、嫌い・好き・そのどちらでもないという三種の感情を起こさせる、色や形がある眼の対象や、耳で聞く音声・鼻で嗅ぐ香・舌で味わう味・皮膚に触れる感触という、五種類の知覚・認識対象のすがたに身を変える。そして、色や形や、音声・香・味・感触という知覚・認識対象のすがたを借りて現われ、修行者が善をなそうとする心を打ち壊す。

三種の魔羅鬼のすがたの第一は、色や形や、音声・香・味・感触を対象として、眼・耳・鼻・舌・身の知覚・認識のはたらきが造り出す感情が、修行者には受け入れがたい嫌な思いを起こさせる。魔羅鬼は、恐ろしい色や形や、音声・香・味・感触を知覚・認識対象のすがたに身を変えて現われ、修行者を恐れ戦かせる。

第二は、色や形や、音声・香・味・感触を対象として、眼・耳・鼻・舌・身の知覚・認識のはたらきが造り出す感情が、修行者の気持ちに添い、素直に受け入れられる思いを起こさせる。魔羅鬼は、修行者が好んで受け入れ、受け入れたものに執着し、貪り求めて止むことがない色や形や、

音声・香・味・感触という知覚・認識対象のすがたに身を変え、修行者の心をこれらの対象に執着させ、対象から離れられなくする。

第三は、色や形や、音声・香・味・感触を対象として、眼・耳・鼻・舌・身の知覚・認識のはたらきが造り出す感情が、修行者の気持ちに添わないのでもなく添うのでもない思いを起こさせる。魔羅鬼は、対象に対して造り出す感情が、修行者が気持ちに添わないのでもなく添うのでもない普通の色や形や、音声・香・味・感触という知覚・認識対象のすがたに身を変えつつも、それでいて修行者の心を掻き乱す。

このように魔羅鬼は、色や形がある眼の対象や、音声・香・味・感触を対象として、眼・耳・鼻・舌・身の知覚・認識作用が造り出す感情が、修行者には受け入れがたいすがたに身を変えたり、受け入れやすいすがたに身を変えたり、そのどちらでもないすがたに身を変えたりする。言い換えれば、修行者が造り出す自我意識が魔羅鬼である。心に生起する自我意識は、修行者の心を乱し悩まし、悪に誘って善心を妨げ、生命を奪うから、命を断つ者「殺者」と名

づけたり、花の矢「華箭」^{けせん}と呼んだりする。

華箭は五本であるから、五箭とも呼ばれる。五箭は、色や形や、音声・香・味・感触という五本の矢をいう。この五本の矢が、眼・耳・鼻・舌・身の知覚・認識作用が起す五種の情欲という的の真ん中を射抜き、自我意識を煽^{あお}るから、五箭と呼ばれる。

修行者は、一つの対象を見ると、それが受け入れやすい対象か、受け入れがたい対象か、そのどちらでもない対象か、三種のどれかに分別し、分別した対象のすがたを見て惑い乱れる。

修行者が受け入れやすい対象となつて魔羅鬼が現われるというのは、魔羅鬼が、ときには父や母のすがたを借りて現われ、ときには兄や弟のすがたを借りて現われ、ときには諸仏の三十二のよきすがたを借りて現われ、ときには体付きの立派な男子や麗しい容姿の女子のすがたを借りて現われたりという、修行者に受け入れられやすい対象となつて現われることをいう。修行者は、現われた対象に執着し、その対象から離れられなくなる。

修行者が受け入れがたい対象となつて魔羅鬼が現われる

というのは、魔羅鬼が、ときには虎のすがたを取つて現われ、ときには狼のすがたを取つて現われ、ときには百獣の王の獅子のすがたを取つて現われ、ときには人を魅惑したり喰つたりする恐ろしい羅刹という鬼のすがたを取つて現われたりすることをいう。魔羅鬼は、恐ろしいすがたに身を変えて現われ、修行者を恐れ戦かす。

修行者が受け入れやすいのでもなく受け入れがたいのでもない対象となつて、魔羅鬼が現われるというのは、魔羅鬼が、普通のすがたに身を変えて現われ、修行者の静かな心を掻き乱して集中できなくすることをいう。

このように仏道修行を妨げる眼に見える対象を、魔羅鬼と呼ぶ。

魔羅鬼は、このように色や形のある眼の対象となるすがたに身を変えて現われるほか、ときには種々の好ましい音や声や嫌な音や声となつて現われたり、ときには種々の芳しい香の空気や嫌な臭いの空気となつて現われたり、ときには種々の好きな味や嫌な味となつて現われたり、ときには種々の苦しみをもたらす対象や楽しみを造り出す対象となつて現われたり、ときには修行者に近づいて修行者の身

体に触れたりする。

これらはすべて、仏道修行の妨げとなる魔羅鬼のしわざである。魔羅鬼のしわざはおびただしい数に上るから、一つひとつを説き尽くすことはできない。

肝心なことを取り上げるならば、眼根・耳根・鼻根・舌根・身根という感覚器官を通して、眼識・耳識・鼻識・舌識・身識が知覚し認識する色や形の色境、音声の声境、香の香境、味の味境、触れられるものの触境という、知覚・認識対象を造り出して修行者の心を懊惱動乱させ、不殺生や不偷盗や不邪淫のような十の正しい行ないを失わせ、心に種々の迷いを起こさせるのは全て、魔羅鬼の軍勢がなすしわざである。

魔羅鬼の軍勢のしわざとするのは、一切はあるがままにあるという、当たり前の真実を説く仏の智慧を蔽い隠してしまい、貪りや、憂いや、怒りや、心を晦ます眠りなどに代表される、仏道修行の妨げを起こすからである。

従って、『仏本行集経』の偈には、次のように説いている。

「執着が、修行者を襲う最初の魔軍であり、

憂いが、第二の魔軍である。

飢えと渇きが、第三の魔軍であり、
貪りが、第四の魔軍である。

やる気を失い眠るのが、第五の魔軍であり、
恐れ戦く心が、第六の魔軍である。

疑いや後悔が、第七の魔軍であり、
自分の心と違うものに怒り憎む心が、第八の魔軍である。

財を貪り名誉を求めようとする心が、第九の魔軍であり、
悟ったと自ら高ぶり人を蔑む心が、第十の魔軍である。

これらの十の魔軍は、
すべてを捨てた修行者を厭い滅ぼそうする。

わたし仏陀は、禅定によって得た智慧の力によって、
修行者が起こすこれらの魔軍を打ち破った。

そして、修行を完成しおわって、

一切の迷える衆生を悟りの彼岸に渡らせる。」と。

つまり修行者は、仏道の妨げとなる魔羅鬼のしわざを自覚したならば、自分の力でこれらの魔羅鬼のしわざを絶対

に取り除かなければならない。

魔羅鬼のしわざを完全に取除く方法に、二種類がある。

一は、臍下三寸の丹田に心を落ち着け、一つの対象に専注する「止」の修行法を實踐して、魔羅鬼のしわざを取り除く方法である。

修行者は「止」の修行実践によって、自我に塗れた目で、外界の対象が独自のすがたで存在していると見、独自のすがたで存在していると見るものを、好ましいと見たり好ましくないと見たりすることは、魔羅鬼が造り出す真実に違うしわざであると知る。

真実に違ふと知ると、好ましいものに執著したり、好ましくないものを怖れることがない。外界の対象を好きか嫌いかで、好きを取り嫌いを捨てるということもない。

この境地に至れば、外界の対象に心を移すことがなく心は静かで澄み切っているから、魔羅鬼のしわざは自然に消滅していくものである。

二は、自我を否定し、物事の真相を観察する智慧を引き出す「観」の修行法を實踐して、魔羅鬼のしわざを完全に取除く方法である。

『天台小止観』の研究(七)(大野)

これまでに説き明かしたように、魔羅鬼のしわざとされる自我によって造り出される対象世界をみたとき、「止」の修行法を實踐しても、魔羅鬼のしわざが消滅しなければ、その時は、外界の対象を見るおのれの心を、おのれが本来もっている智慧で観なければならぬ。

もし魔羅鬼がよりどころとする対象世界がなく、魔羅鬼が対象世界を見ることがなければ、どうして魔羅鬼が修行者を悩ますことができるだろうか。

このように、魔羅鬼がよりどころとする対象世界がないと見極めることができれば、即座に魔羅鬼のしわざは消滅する。

もし、魔羅鬼のしわざがのろろとして消滅しないときには、一切は現象しているという真実を深く思念して、魔羅鬼のしわざに恐れ戦くことなく、生命を惜しむことなく、心を正しくはたらかしてたじろぐことがなければ、魔羅鬼の世界も仏の世界も本質的には同一であるから、魔羅鬼の世界はそのまま仏の世界であると思ひ至る。

つまり、魔羅鬼の世界と仏の世界とは、共にただ一つの真実であつて、二つの世界ではない。このように見極める

ことができれば、魔羅鬼の世界のすがただからといって、捨て去るべき魔界もなければ、仏の世界のすがただからといって、執著すべき仏界もない。一切は心の現象であるとい極めた境地にあれば、そこには魔羅鬼の世界という魔界もなければ、仏の世界という仏界もない。ただ己の心が造り出した世界である。

この境地では、修行者は仏が説く教えそのままに包まれた生き方ができる。仏が説く教えに包まれた生き方ができれば、修行者の心を惑乱する魔羅鬼のしわざは消滅する。

また次に、魔羅鬼のしわざが消滅しないのを見ても、当然、憂いを抱いてはならない。逆に、魔羅鬼のしわざが消滅するのを見ても、喜んではならない。

理由は、どこにあるのか。

これまでに、修行者が坐禅をしているときに、魔羅鬼がすがたを変えて虎や狼となったり、すがたを変えた虎や狼が近づいてきて、坐禅をしている修行者を喰ったという例をついぞ見たことがない。ましてや、これまでに魔羅鬼がすがたを変えて男子になったり女子になったり、その上に、夫婦になったりした例を見たことがない。

ここで承知しておいてほしいことは、魔羅鬼がすがたを変えて現出するのは、すべて幻覚であるということである。

自我を捨てきれない愚かな人は、現出する魔羅鬼のしわざを、自我が造り出す実体のない幻覚に過ぎないことを知らない。知らないから、心に驚きや怖れを抱き、幻覚に過ぎない魔羅鬼のしわざを貪り求め、徹底して執著するのである。

幻覚に徹底して執著するから、修行者は、心を乱し、心の統一を失い、心を狂わせ、遂には身体的な病まで引き起こすことになる。

これまで説き明かした魔羅鬼のしわざが、修行者に、魔羅鬼のしわざは実体がない幻覚に過ぎないと見極める正しい智慧がないから、身体的な病まで引き起こすのであって、魔羅鬼がなすしわざはすべて、魔羅鬼のしわざではない。すべては、修行者の心が造り出す幻覚であり、執著する必要のない妄想に過ぎないのである。

また次に、いろいろな魔羅鬼のしわざによる心の混乱が、年月を経ても消滅しないときには、心のおもいを正しく保つて、意志を揺るぎないものにしなければならない。身命を

惜しむことなく、憂いたり心配したりしないようにしなければならぬ。

魔羅鬼のしわざで心が混乱するときは、『方等陀羅尼經』などが説く十八種の摩訶袒陀羅尼を始めとして、大乘經典に説き示されている魔羅鬼を対治する呪文を唱えたり、心に念じたり、仏・法・僧の三宝を片時も忘れず思い続けているなければならない。

心静かで安定した禪定の境地から出ようとするときも、摩訶袒持陀羅尼の呪文を唱え、魔羅鬼に魅入られて心の隙間に雑念が入るのを防ぐように自分で務めなければならぬ。魔羅鬼に魅入られて心が混乱しないように、自分が造った罪業を師に告白し、罪を恥し、教団において守るべき十重禁戒や四十八輕戒や三聚淨戒などの条文を唱えなければならぬ。

邪である魔羅鬼が、正しく仏道を歩む者を犯すことは無い。魔羅鬼は、時間が経てば自然に消滅するものである。

魔羅鬼のしわざは、多岐にわたる。従って、どれほど詳細に説き明かしても、すべてを説き尽くすことはできない。このことを十分に念頭に置かなければならない。そのよう

『天台小止観』の研究(七)(大野)

な訳であるから、仏の教えを求める道に初めて入る修行者は、どうしても外護・同行・教授という三つの条件を具えた善知識、すなわち指導者に親しみ近づく必要がある。

善知識に親しみ近づかなければならないのは、初心の修行者は、次に説くように、魔羅鬼のしわざに惑わされて正しい道を外れるという、一人では乗り越えることが難しいことがあるからである。

心の幻覚に過ぎない魔羅鬼が人の心に入り込むと、修行者の心は狂ってしまう。心を暗く沈ませたり、心を騒がしく動かせたりする。この憂鬱や興奮が原因となって身体的な病を引き起こし、果ては死に至らせてしまう。

修行者自身の中で魔羅鬼が変身し、ときには禪定を得、ときには智慧を得、ときには超人的な神通力を得、あるいはときには陀羅尼の呪文を得たという。

修行者は、魔羅鬼が変身して得た邪悪な禪定や智慧や神通や陀羅尼によって、教えを人々に説き明かし、教え諭す。人々は、一旦はその教えを信じ、心から従う。しかし後になつて、魔羅鬼が変身して得た教えは、出家の修行者の生命である、己を捨てて人々を救済しようとする善事を打ち

『天台小止観』の研究（七）（大野）

壊してしまう。結局、魔羅鬼の邪悪な教えが、正しい仏の教えを破壊してしまうことになる。

以上説き明かしてきたように、魔羅鬼のすがたはいろいろで、一つのすがたに決まっていない。いろいろ説き示してきたが、魔羅鬼のしわざのすべてを説き尽くすことはできない。

これまで簡略に、魔羅鬼のしわざの肝心の点を説き明かしてきた。それは、修行者が、心の安定を得ようと取り組む坐禅の中で起こる妨げを、正しい仏の教えであると思いついて、無造作に魔羅鬼の世界に迷い込み取り込まれることを避けるためである。

大切な点を挙げれば、魔羅鬼に惑わされた邪心を取り除き、本来の自己を取り戻して、仏の教えに基づく正道に落ち着きたいと願うならば、存在するものすべてがあらまにあり、すべてが完全に調和した世界にあるという、諸法実相の真実そのものを実観しなければならぬ。

臍下三寸の丹田に心を落ち着け、心を一つの対象に專注する「止」の修行法と、自我を否定し、物事の実相を観察する智慧を引き出す「観」の修行法とを連動して実践し、

諸法実相を実観し続けられれば、魔羅鬼が修行者の心おとしを邪な道に陥れても、必ずそれを打ち破ることができる。

従って、『大智度論』巻第五には、

「ありのままに存在するものすべてが、真実のすがたにある。

それ以外の心はすべて魔羅鬼のなすしわざである。」

と説き明かしている。さらに、『大智度論』巻第二十の偈の中で、次のように説き示している。

「心であれこれ思うこと、

これが、魔羅鬼が張り巡らした綱である。

対象にとらわれて、心を乱すことなく、

対象を思い計り分別することがない。

そうすれば、魔羅鬼の網の虜になることはない。

おそるべきは自我、

これが、仏の教えの旗印の諸法実相である。」